

富山県 婦中町  
小倉中稻遺跡 発掘調査報告(2)

1994年3月

婦中町教育委員会



平成 5 年度調査区全景



C地区出土輸入陶磁器

# 序

小倉中稻遺跡は滝山城・常楽寺などの文化財を背後に広々と開けゆく水田地帯である小倉地区に所在します。同地区で県営は場整備事業が実施されるのに先立ち、この小倉中稻遺跡の発掘調査を平成4・5年の2カ年にわたり実施いたしました。

その結果、遺跡は鎌倉時代から江戸時代にかけて営まれた集落遺跡であった事がわかりました。これは婦中町における中世の歴史を考える上で重要な資料であると思います。また、平成5年11月23日には現地説明会を開催し百余名の方々の参加をいただきました。

ここに小倉中稻遺跡の成果をまとめることができました。本書は今後の調査研究を進める上で参考にしていただくとともに埋蔵文化財に対して、より以上の理解に役立てていただければ幸いに思います。

終わりに調査を実施するにあたり地元の方々を初め関係者の皆さんへの深いご理解とご協力に対し心からお礼申し上げます。

平成6年3月

婦中町教育委員会

教育長 清水信義

## 例　言

- 1 本書は富山県婦負郡婦中町小倉地内に所在する小倉中稻遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は県営農地流動化特別促進場整備実験事業（婦中町小倉地区）の実施に先立ち、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて婦中町教育委員会が実施した。調査費用の地元農家負担金は婦中町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。調査の実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受けた。
- 3 調査事務所は婦中町教育委員会生涯学習課に置き、文化係長見波重尋が調査事務を担当し課長清水隆吉が総括した。また、調査にあたって作業員・仮設調査事務所敷地・写真撮影などにはそれぞれ、婦中町シルバー人材センター・第八尾コンクリート・松永昭弘氏の協力を得た。
- 4 調査期間・面積は次のとおりである。

B 1 地区	平成 5 年 7 月 5 日～8 月 9 日	調査面積 1,000m <sup>2</sup>
C 地区	平成 5 年 7 月 15 日～12 月 22 日	調査面積 2,600m <sup>2</sup>
D 地区	平成 5 年 11 月 16 日～12 月 24 日	調査面積 340m <sup>2</sup>
- 5 試掘調査・発掘調査担当者および調査員は次のとおりである。

試掘調査（平成 4 年度）調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事 岡本淳一郎・伊佐智法
本調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事 高梨清志
調査員	婦中町教育委員会	主　事 片岡英子
同	富山県埋蔵文化財センター	調査課課長 犬野　睦
同	同	主　任 潤井重洋・久々忠義
同	同	文化財保護主事 塙　洋子・越前慶祐
- 6 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て、調査担当者がこれに当った。
- 7 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から援助を頂いた。記して深甚なる謝意を表したい。

安念伴倫・上野　章・伊佐智法・宇野隆夫・岡本淳一郎・斎藤　隆・島田修一・橋本正春・桃野真亮・宮田進一
- 8 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
  - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
  - (2) 基準杭は調査区の西側を通る主要地方道八尾小杉線に沿って、任意に 2 点の基準点を設定した(X90・Y 0 ~ X 110・Y 0)。なお、基準杭の X 軸は真北から 9°54' 西へ偏る。
  - (3) 遺構の表記は次の記号を用いた。

標立柱建物	: SB	溝	: SD	穴	: SK	ビット	: SP	井戸	: SE
-------	------	---	------	---	------	-----	------	----	------
  - (4) 掘開の土器の縮尺は、陶器類（珠洲・越前・八尾）は 1/4 にし、その他は 1/3 に統一した。写真図版の遺物の縮尺は、原則として 1/2・1/3 とした。
- 9 出土品および記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査・遺物整理参加者は次のとおりである。

安部正信・館谷君子・生田寿美子・生田　崇・生田　弘・大場綾子・加藤數信・川島　武・田中幸一・寺山三郎・橋渡美枝・横江信子（現地作業員）

稲石純子・内田亜紀子・大野淳也・河合　忍・近藤美紀・佐藤聖子・大秦司統・大平奈央子・坪田聰子・福海貴子・松原和也・森田知香子・米出敬子（調査補助員）

生田寿美子・中坪千春（整理作業員）

本文目次

序 文

例 言

## 目 次

I 序 章 .....	1	IV C地区 .....	10
1 位置と環境 .....	1	1 遺 構 .....	10
II 調査の経緯と経過 .....	2	2 遺 物 .....	26
1 調査の経緯と試験調査の概要 .....	2	V D地区 .....	34
2 地形と本調査の経過 .....	4	1 遺 構 .....	34
III B 1地区 .....	5	2 遺 物 .....	36
1 遺 構 .....	5	VI まとめ .....	37
2 遺 物 .....	9	引用・参考文献	
		写真図版	

插図目次

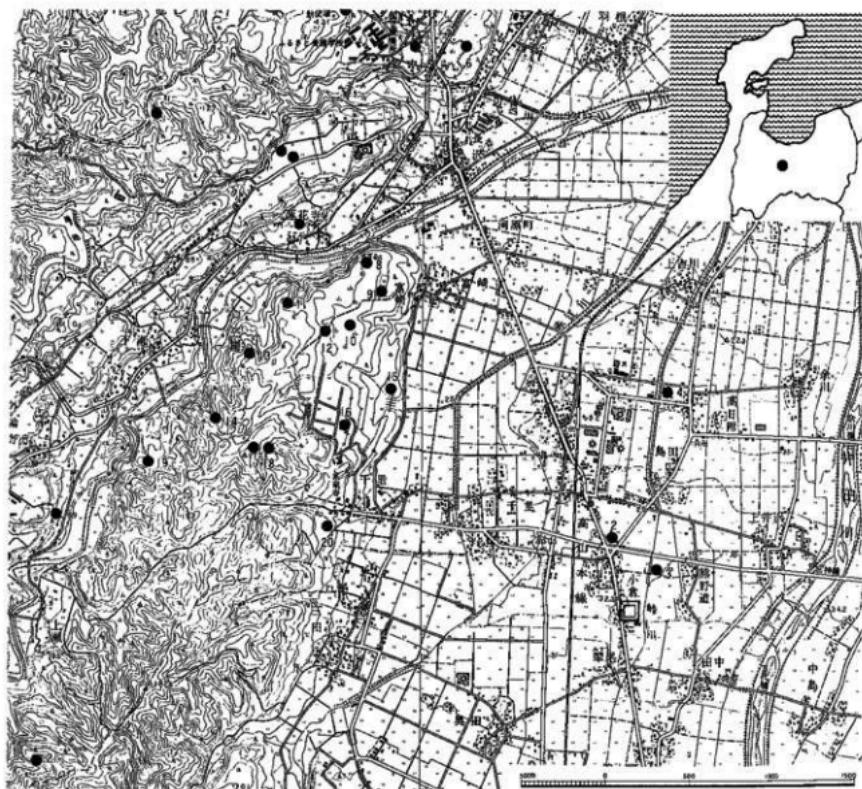
第1図 地形と周辺の遺跡	第20図 SE276・SK182・219
第2図 試掘調査位置と遺跡範囲	第21図 中世土器分類表
第3図 地形と調査区割図	第22図 出土遺物実測図
第4図 SB01・02・SK04・32・35・37・38	第23図 出土遺物実測図
第5図 小倉中船遺跡B1地区遺構配置図 及び遺構断面図	第24図 出土遺物実測図
第6図 包含層出土遺物分布図	第25図 出土遺物実測図
第7図 出土遺物実測図	第26図 出土遺物実測図
第8図 基本層位模式図	第27図 包含層出土遺物分布図
第9図 基本層位・SD122・128・224・225	第28図 小倉中船遺跡D地区遺構配置図
第10図 小倉中船遺跡C地区遺構配置図	第29図 SK501～509・513・511・SP510・512・518・524・ 526・534・535・537
第11図 SB01・02・03・04	第30図 包含層出土遺物分布図
第12図 SB05・06・07・08	第31図 出土遺物実測図
第13図 SB09・SK270	第32図 C地区ピット分類
第14図 SB10・11・12・13	第33図 小倉中船遺跡平成4・5年度調査地区遺構 配置図
第15図 SB14	第34図 小倉中船遺跡時期別遺構配置
第16図 SE127・138・144・159・228	表1 小倉中船遺跡試掘調査結果
第17図 SK99・223・153・151・154	表2 据立柱建物計測一覧
第18図 SK130・149・214・222	表3 C地区ピット分類
第19図 小倉中船遺跡C地区遺構配置図 及び遺構断面図（近世以降）	表4 C地区柱穴分類

# I 序 章

## 1. 位置と環境 (第1図)

本書で報告する小倉中稻遺跡は富山県婦負郡婦中町小倉地内に所在している。

婦中町は富山県のはば中央部に位置する町で、町域は丘陵部と平野部に大別される。丘陵部は富山県を呉東と呉西に二分する吳羽丘陵から牛岳へと連なり、平野部は神通川と井田川によって形成された扇状地で、富山平野に続く。神通川は町域の東部に沿って北流する。井田川は平野部の中央を貫流し、支流の山田川は西南部の山谷を曲流し外輪野地区で河岸段丘を形成して平野部に出て羽根地区で井田川と合流する。小倉中稻遺跡は井田川左岸の平野部に位置し、12世紀後半～16世紀後半にわたって営まれた集落遺跡である。周辺には先土器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が存在している。主な遺跡としては細谷遺跡群（先土器・縄文時代）、牛滑遺跡（縄文時代中期～後期）、高日附遺跡（弥生時代）、勅使塚古墳・富崎千里古墳群千里支群・小倉雜水河原遺跡（古墳時代）などがある。中世に入ると遺跡の西に位置する富崎山には富崎城・森山城跡・高山城跡など多くの城館が築かれる。このことから、当地区が富山平野から砺波平野・飛騨へ抜ける交通・戦略上の要所として、重要な位置を占めていたことがうかがえる。（高梨）



第1図 地形と周囲の遺跡 1. 小倉中稻遺跡 2. 小倉中稻II遺跡 3. 小倉雜水河原遺跡 4. 高日附遺跡 5. 勅使塚古墳 6. 千坊山遺跡  
7. 蓬花寺遺跡 8. 富崎城跡 9. 富崎野畠遺跡 10. 富崎南野遺跡 11. 下瀬離山遺跡 12. 富崎赤坂遺跡 13. 下瀬離山遺跡 14. 下瀬離山遺跡  
15. 富崎千里古墳群 16. 千里片板遺跡 17. 森田山城跡 18. ゴダイ塚 19. 大船城跡 20. 牛滑遺跡 21. 高山城跡

## II 調査の経緯と経過

### 1. 調査の経緯と試掘調査の概要 (第2回)

平成2年度、県営農地流動化特別促進は場整備実験事業（婦中町小倉地区）が策定された。これを受け、県教育委員会及び婦中町教育委員会・富山県農地林務事務所並びに地元土地改良区とで協議を行い、同年12月に分布調査を実施し、遺物散布地を9地点で確認した。翌3年度に5箇所で試掘調査を行い、小倉中稻遺跡・小倉雜水河原遺跡を確認した。

平成4年度の試掘調査は工事地域に係る4箇所（No.2・7・8・9）を対象として行った。調査は重機及び人力により試掘トレンチを掘り下げ、遺物包含層と造構の有無の確認を目的とした。期間は、No.2地区を対象とした第1期調査が5月11日・12日、No.7・8・9地区を対象とした第2期調査が10月14日～10月20日である。

これらの地区は、地形的にはいずれも井田川左岸の標高約31m～32mの扇状地上に位置する。

No.2地区 調査区の地形は西側を中心に微高地状を呈する。調査は約8,400m<sup>2</sup>の対象地に試掘トレンチを13本設けて、地表面（20～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、造構については黒褐色砂質ロームを覆土とする穴を5箇所確認した。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。中世土師器は12世紀末～13世紀初めの小型（口径約8cm）で底部系切りをもつ、珠洲は壺・片口鉢の胴部である。造構・遺物から、微高地状の西側は小倉中稻遺跡の一部とする。

No.7地区 調査は約7,200m<sup>2</sup>の対象地に試掘トレンチ12本を設けて、地表面（10～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、造構・遺物は確認されなかった。

No.8地区 調査は約3,000m<sup>2</sup>の対象地に試掘トレンチ6本を設けて、地表面（20～60cm）まで掘り下げた。調査の結果、造構・遺物は確認されなかった。

No.9地区 調査区の中央に約50cmの小谷状の段差があり、東側を中心に微高地になっている。調査は約2,200m<sup>2</sup>の対象地に試掘トレンチ4本を設けて、地表面（15～50cm）まで掘り下げた。調査の結果、造構は穴・溝を検出した。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。珠洲は片口鉢の体部から底部にかけての破片とこね鉢の口縁部、および壺の胴部である。こね鉢は13世紀のものである。造構・遺物等から、東側の微高地は小倉中稻遺跡の一部とする。

#### 試掘調査のまとめ

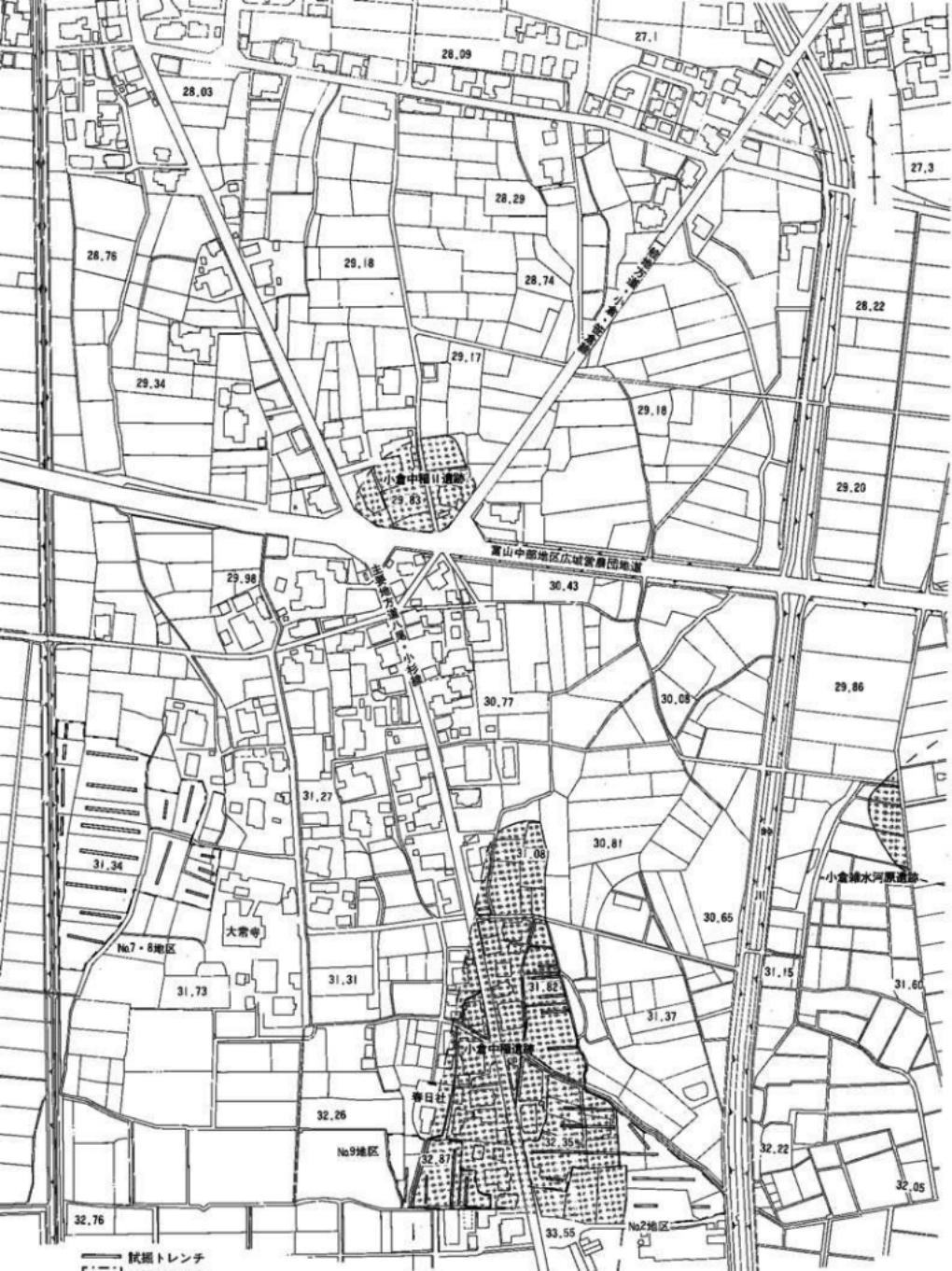
調査の結果No.2・9地区で小倉中稻遺跡の広がりを確認できた。また、小倉中稻遺跡が南北に長く延びる微高地に位置する遺跡であることがわかった。この微高地の統く八尾町域まで遺跡が広がる可能性は高いものと考える。

(伊佐)

表1 試掘調査結果

地区名	試掘年月	時代	遺跡名
No.1	平成3年5月	古墳・中世	小倉雜水河原遺跡
No.2	平成4年5月	中世	小倉中稻遺跡
No.3	平成3年11月	中世	小倉中稻遺跡
No.4	平成3年11月	——	——
No.5	平成3年11月	中世	小倉中稻II遺跡

地区名	試掘年月	時代	遺跡名
No.6	平成3年11月	——	——
No.7	平成4年10月	——	——
No.8	平成4年10月	——	——
No.9	平成4年10月	中世	小倉中稻遺跡



第2図 試掘調査位置と遺跡範囲(1/3,000)

小倉中稲遺跡、小倉中稲II遺跡、小倉雜水河原遺跡

(IIH-No.2・No.3・No.9・No.5・No.1)

0

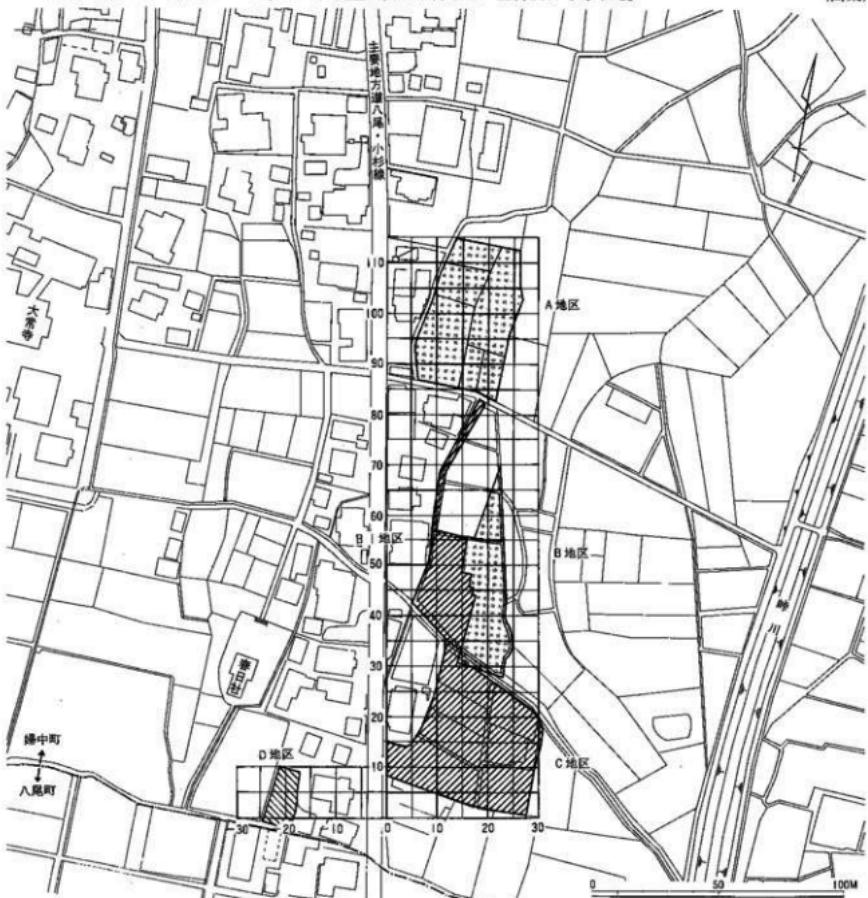
150M

## 2. 地形と本調査の経過（第3図）

小倉中稻遺跡は山田川の支流の峰川の左岸に位置する。地山は標高約31mを測り、南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡地は現在、宅地・水田・畑として利用されている。調査地区付近は現在までは場整備がおこなわれておらず、峰川の旧河岸跡など旧地形が良く残っている。

今年度の調査は昨年度の協議に基づき、今年度の施工範囲で工事により影響を受ける農道・用排水・水田部分であるB1・C・D地区の3箇所で行なった。調査は試掘の結果をもとにバックホーによる表土除去をおこなった。次に10m間隔の基準杭の設定を行ない $2 \times 2$ mを一区画とした調査区を設けた。その後人力により遺構確認を行ない、引き続き個々の遺構ごとに検出を行なった。C地区では表土除去後遺跡が東へ延びるのを確認したため調査区を拡張した。調査面積は3地区合わせて3,940m<sup>2</sup>、調査期間は7月5日～12月24日であった。

(高梨)



第3図 地形と調査区割図(1/2,000)

### III B 1 地区

#### 1. 造構

調査によって検出した主な造構は掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、溝 6 条、土坑、ピットである。

##### (1) 基本層位 (第 5 図)

昨年調査した B 地区の西側にあたり、造物包含層ではなく造構構築面は上下 2 面確認された。上層は表土直下の⑧⑨層 (昨年度の III 層) である。上層から掘り込まれる造構は SE38、SD41、SK32・34・35・37 がある。⑩層は X47~50 の東西に延びる。井戸の断ち割りに伴い、下層確認を行った結果、埋没河川の右岸を確認した。⑪層はこの埋没河川の上層の覆土である。下層の①②層は昨年度の V 層にあたり下層から掘り込まれる造構は SB01 がある。

##### (2) 掘立柱建物

今回の調査では 2 棟の掘立柱建物を確認した。2 棟の棟方向はほぼ同じである。なお、検出面は上であるが昨年度の調査の SB01 もこれらと 5~6° の差がある。

**SB01** ⑨層上面から掘り込む。2 間 × 2 間の掘立柱建物で、長軸はほぼ東西方向 (N-86° W) にとる。規模は南北軸総長 3.4m・東西軸総長 3.5m で、柱間は 1.65~1.75m を測る。柱穴は円・楕円を呈し、直径 15~20cm・深さ 16~22cm を測る。柱痕は残っていない。建物の内側・周辺にある土坑や溝は建物より新しい時期である。なお今年度の調査では確認できなかったが、昨年度調査で検出した SD69 は SB01 と同じ検出面で確認しており建物に付属する溝である可能性がある。

**SB02** 1 間 × 1 間の掘立柱建物で、長軸はほぼ東西方向 (N-85° W) にとる。規模は南北軸総長 1.6m・東西軸総長 1.75m を測る。柱穴は円・楕円を呈し、直径 15~26cm・深さ 14~28cm を測る。覆土は褐色土である。SB02 は土坑を囲うようにして建てられており覆屋のような簡素な建物であったとも考えられる。SK01 は楕円形を呈し、長軸 14cm・短軸 66cm・深さ 16cm の土坑であるが性格はよく分からぬ。

##### (3) 井 戸

井戸の名称区分は宇野氏の区分 [宇野 1989] を用いる。

**SE38** 耕作土直下から掘り込む。検出時の規模は直径 1.26m の円形の掘方をもち深さ 1.30m を測る。石組井戸と思われるが、上方の石は抜き取られ、下方 3~4 段しか残っていなかった。井戸底面は湧水層である灰褐色砂層まで達している。水溜の施設は見受けられなかった。覆土は下層まで人為的に埋められており自然堆積層はない。

##### (4) 溝状造構

**SD41** 耕作土直下から掘り込む。東西に流れ、幅 22~108cm・深さ 12cm を測る。底でのレベル差はあまりない。

##### (5) 土 坑

土坑は全て、耕作土直下 (⑧⑨層) から掘り込む。

**SK04** 南北軸約 2.5m・深さ 30cm を測る。造物は中世土師器 (1・2) が出土している。

**SK30** 東西軸約 2.2m・深さ 12cm を測る。

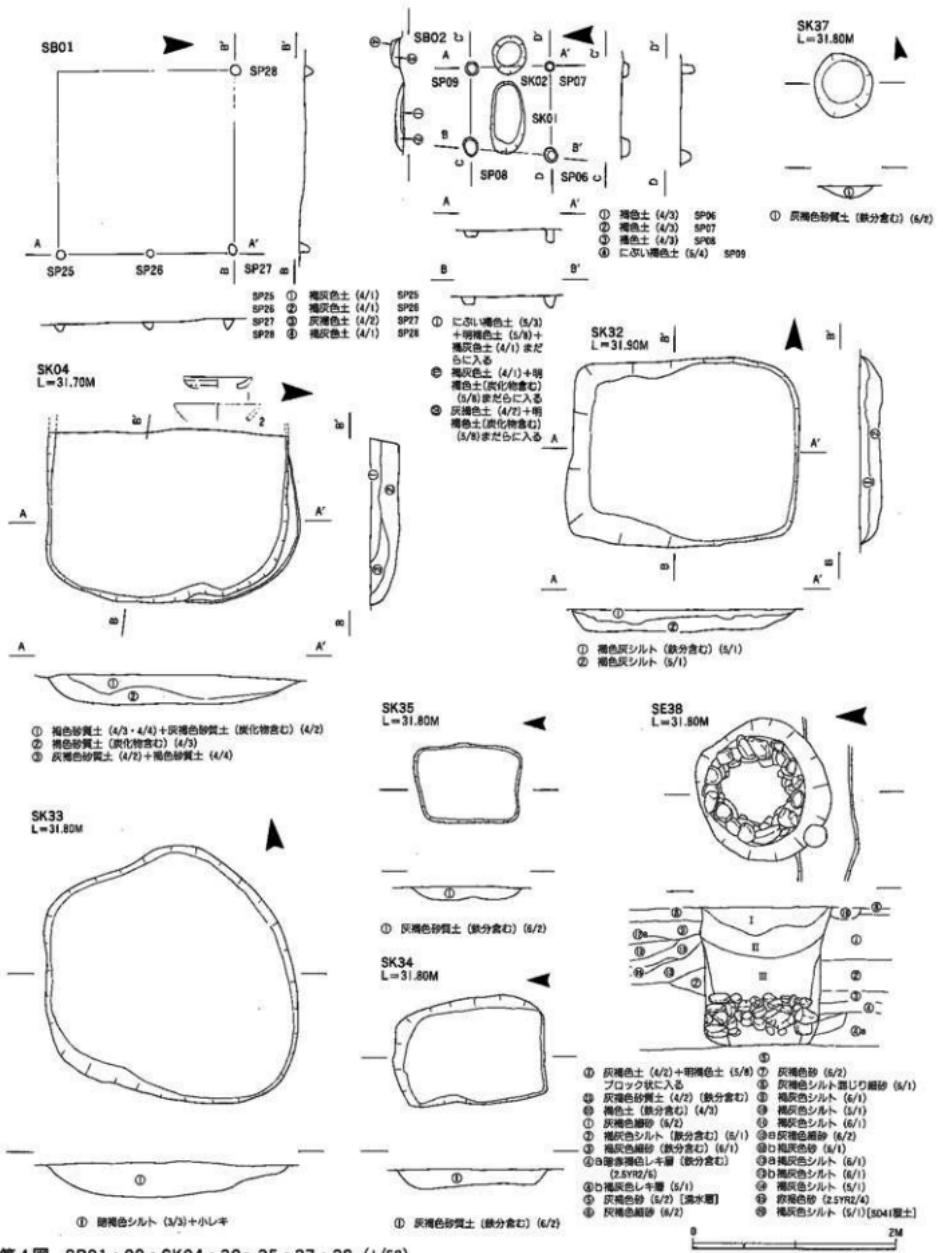
**SK32** 長軸約 2.2m・短軸 1.9m の隅丸長方形を呈する。深さ 22cm を測る。

**SK33** 長軸約 2.4m・短軸 2.2m の不定形を呈する。深さ 36cm を測る。

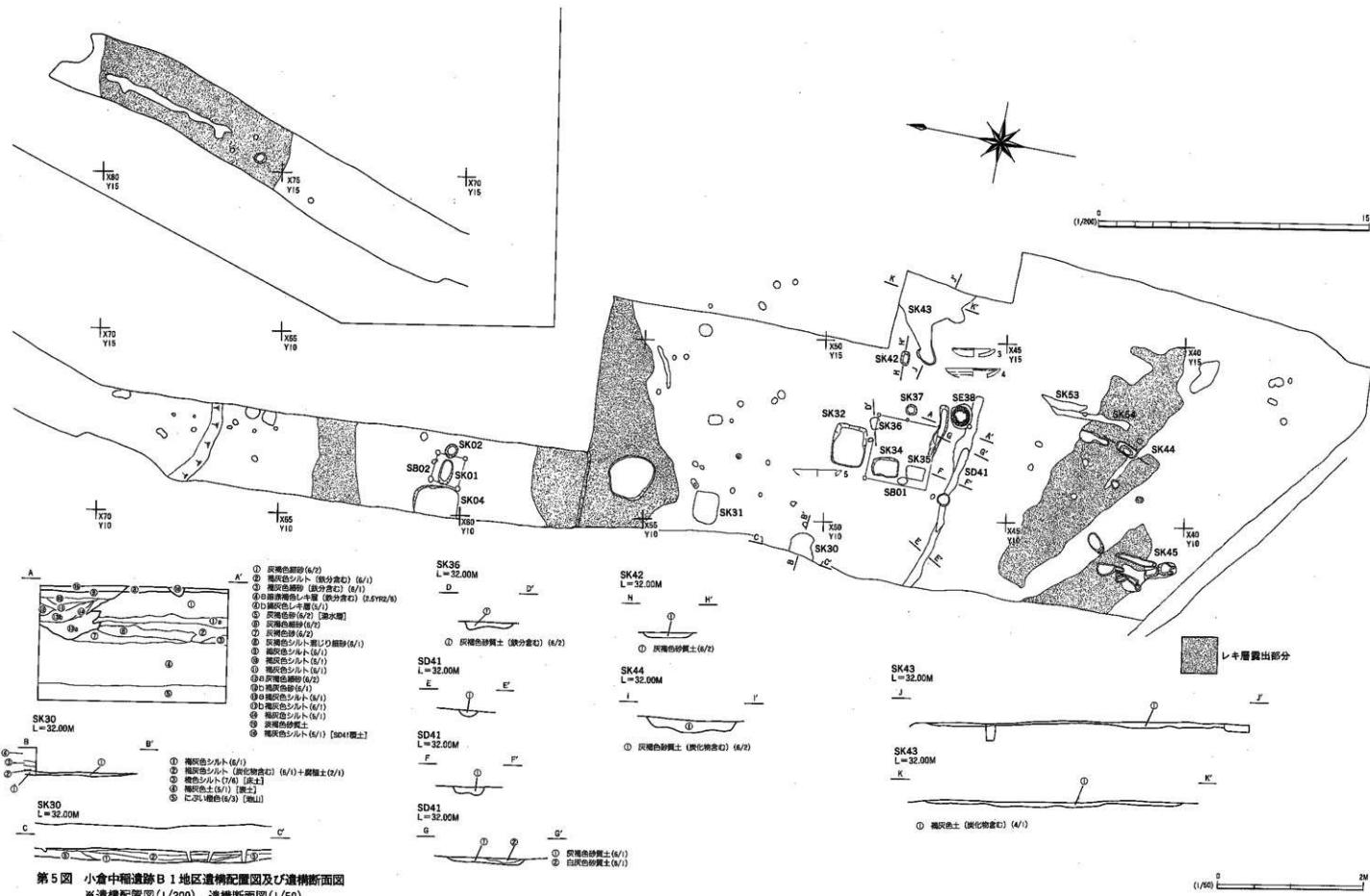
**SK34** 長軸約 1.3m・短軸 1.0m の隅丸長方形を呈する。深さ 22cm を測る。

**SK35** 長軸約 1.1m・短軸 0.7m の隅丸長方形を呈する。深さ 14cm を測る。

**SK37** 直径約 52cm の円形を呈する。深さ 10cm を測る。



第4図 SB01・02・SK04・32～35・37・38 (1/50)



第5図 小倉中稻遺跡B1地区遺構配置図及び遺構断面図  
※遺構配置図(1/200), 遺構断面図(1/50)

SK43 不定形を呈し、深さは8cmと浅い。昨年度調査したSK01・25とつながり最大長は8mに及び昨年度調査のSB01に伴う土坑と考えられ、遺物は中世土師器（3・4）が出土した。

## 2. 遺 物 (第7・21図)

今回の調査で出土した遺物は中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、近世陶磁器、鐵錠がある。出土地点はSB01周辺で最も集中して見られる。記述は遺構ごとに行なう。なお、中世土師器の分類方法は後述のC地区の土師器分類にしたがった。また、白磁は森田編年【森田1983】、珠洲は吉岡編年【吉岡1983】にしたがった。

### (1) 土 坑

SK04 1・2は中世土師器である。1はB5類③で口径8cm・器高1.4cmを測る。2はB7類で口径10cmを測る。

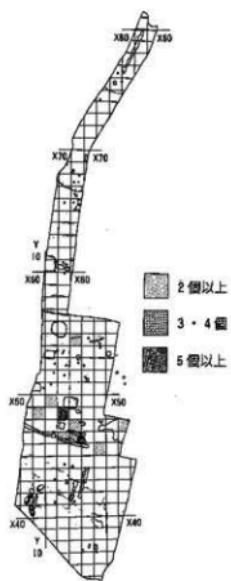
SK32 5は中世土師器である。B5類③で口径7cmを測る。

SK43 3・4は中世土師器である。3はB5類③で口径7cm・器高1.3cmを測る。内面には木口のハケ跡が残る。4はB2類で口径9cm・器高1.5cmを測る。

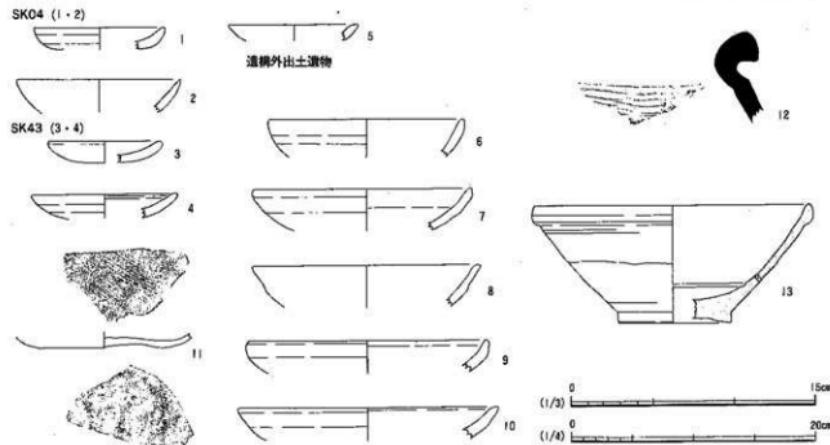
### (2) 遺構外出土遺物

6～11は中世土師器である。6はB2類で口径12cmを測る。7はB4類①で口径13cmを測る。8はB2類で口径14cmを測る。9はB6類で口径15cmを測る。10はB5類①で口径16cmを測る。11は底部で、内面には木口のハケ跡が残る。12は珠洲の斐の口縁部でIII期にあたる。13は白磁の碗である。B1地区で出土したのは底部でB地区で出土した口縁部と同一個体のものである。口縁部を玉縁にし、高台は厚く、削りだしは浅い。内面に沈線状の段をもつ。白磁のIV類-1にあたる。

(片岡)



第6図 包含層出土遺物分布図



第7図 出土遺物実測図 (1/3, 12は1/4)

## IV C 地区

### 1. 遺構 (第8~20図)

調査によって検出したおもな遺構は掘立柱建物14棟、井戸5基、溝20条、土坑約90基、ピット約400基である。中世と近世の2時期あるため、近世以降の遺構は別項目を起て述べる。

#### (1) 基本層位 (第8・9図)

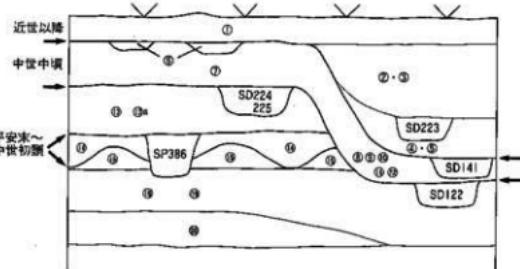
調査区は南北に走る溝を境にして東側が1段低くなっている。また、調査区東側の田面は一段低く遺構は削平されていた。

当地区の基本層位は上から大まかに近世・中世中頃・中世初頭の3時期に分けられる。①層・耕作土、②~⑤層：旧耕作土、⑦~⑨層：中世中頃の包含層、⑩・⑪a層：中世初めの包含層、⑫~⑯層：地山である。

②~⑤層は近世以降の耕作土であり田直しが2回行なわれ、徐々に田面をかさあげていた事がうかがえる。この面から掘り込まれる遺構はSD223がある。⑦~⑨層は中世中頃の包含層であり、その上面から掘り込まれる遺構は⑩層のサク状遺構・SD141があり、時期は近世以降と考えられる。⑩・⑪a層は中世初めの包含層で、その上面から掘り込まれる遺構はSD122・224・225がある。⑫層はサク状遺構の覆土で中世初頭に属し、当遺跡で確認したもっと古い遺構と言える。⑬層はサク状遺構のウメ土にあたる。

#### (2) 掘立柱建物 (第11~15図・表2)

今回の調査では柱穴と思われるピットに関しては断ち割りをおこなった。調査中に建物を構成すると思われた柱穴に関しては建物の軸にそって、その他のものは南か西側を断ち割った。その結果、建物を全部で14棟検出し、出土遺物・検出面から以下の3時期に分けた。⑩・⑪a層下面から掘り込むグループ1：SB01・02・03・04・05・06・07、⑫・⑬a層上面から掘り込むグループ2：SB08・09・10・11・12・13、⑭層上面から掘り込むグループ3：SB14である。柱間は2.2~2.25・2.5・2.8・3.0mの4種類が確認された。時期的にはグループ1は中世初頭(12世紀後半)にグループ2は中世前半(13世紀中頃~後半)グループ3は中世中頃(14世紀末)に位置付けられる。



第8図 基本層位模式図 (層名は第9図のA~Eセクションと同一)

	長 軸	短 軸	面 積	方 位	備 考
SB01	2.8+2.8+2.8+2.7	2.25+2.25+α	50m <sup>2</sup> +α	N-30°-E	
02	2.35+2.5+2.55+2.20	3.05+α	29m <sup>2</sup> +α	N-69°-W	
03	2.25+2.15	2.9	13m <sup>2</sup>	N-65°-W	
04	2.7+2.3	2.7+α	14m <sup>2</sup> +α	N-31°-E	
05	3.05+3.29(1.1+2.3+2.0)	1.9+2.15	26m <sup>2</sup>	N-19°-E	
06	2.8+2.8+α	2.2+2.3+α	25m <sup>2</sup> +α	N-3°-E	
07	2.65+2.35	2.45+2.1	23m <sup>2</sup>	N-22°-E	
08	1.45+2.05	2.8	10m <sup>2</sup>	N-25°-E	
09	1.95+2.25+2.3	2.5+2.75+2.75	70m <sup>2</sup>	N-75°-W	SK270が付属
10	2.25+2.45+2.5	2.3	17m <sup>2</sup>	N-77°-W	
11	2.4+2.2+2.15	2.35	16m <sup>2</sup>	N-76°-W	
12	2.45+2.45	2.35	12m <sup>2</sup>	N-16°-E	
13	2.25+3.1	2.3+2.4	27m <sup>2</sup>	N-10°-E	
14	2.4+2.45	1.95+2.2+α	21m <sup>2</sup> +α	N-13°-E	

表2 掘立柱建物計測一覧 \*柱間の計測位置は原則として建物の北と東側、間数が変わるものに関しては( )内に記した。

なお、ピットに関しての詳細はまとめの項で述べる。

**グループ1** 方位によりSB01・03・04、SB02・05、SB06・07の3つに分けられる。SB06・07は柱穴を共用しており建て替えであろう。SB03のP3は根石をもち、遺物は根石の下から中世土師器（1・2）が出土している。

**グループ2** SB09を中心とし小型の建物（SB10・11・12・13）が建てられる。SB09は当地区で最大の建物である。A-A' と B-B' のセクション間は他の柱間と比べ狭く、また柱穴も小さく浅いため脂部分と考える。SK270はSB09と同軸方向であるため、SB09に付属すると考えられる。SK270は長軸4m短軸3.5mを測る不定形の土坑で深さは10cmと浅い。覆土には黒褐色腐植土が入る。また、SK270からSD271が流れ出しており、これらは一連のものと考える。SB10と11は建て替えと思われる。また、ともに南北方向へ柱間数が延びる可能性もあるが若干ずれるためここでは1間×3間の建物とした。この他、SB12は平面プランでは東へ続く可能性もあるが（SP81・90・91・92・93）これらのピットは検出面が②層上面であるためここでは1間×2間の建物とした。遺物はSB09のP7・12から中世土師器（3・4）が出土している。SK270の上層からは平窓（33）、瓦質の片口鉢、珠洲の甕腹部片、鐵錠が出土している。SD271からは中世土師器が出土している。

**グループ3** 調査区の南東部の方形区画内に位置する。SB14は柱間にはかなりバラツキが見られ、他の2グループと比べ柱穴も小さく浅い。遺物は出土していない。掘立柱建物はSB14だけであるが、後述するSK222も同時期で簡単な覆屋をもつと考えられる。

### (3) 井 戸 (第16図)

井戸は全部で5基検出した。うち、石組井戸4基（SE127・138・144・228）、木組井戸1基である。SE127・138・144の3基は隣接して構築されている。石組井戸の積み石は河原石を使い、平面プランは円形を呈し、右回りで石を積む。SE127・138は石組井戸と思われるが石は抜かれている。これは、石組井戸の廃棄パターンの一つであろうか。また、石組井戸は礫層を貯き湧水面である砂層に達するが、木組井戸は礫層で止まっており時期によっては地下水が礫層まで上がっていたことがうかがえる。検出面はSE127・138・144が基本層位の⑩層直下、SE228が⑦層直下、SE159が②層直下から掘り込まれる。

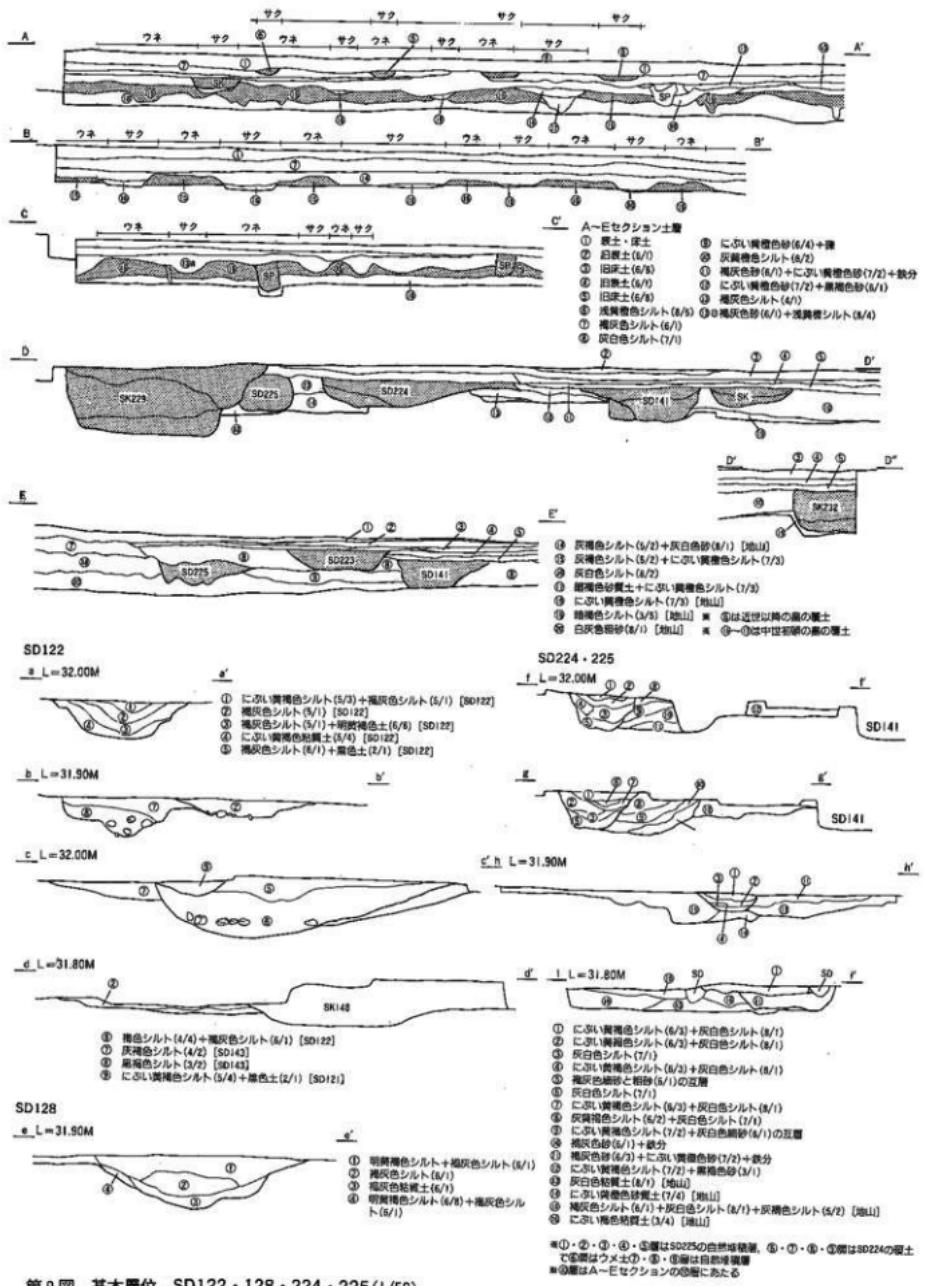
**SE127** 検出面での規模は、直径1.58mの円形の掘方をもち、深さ1.16mを測る。石組井戸と思われるが、石はすべて抜かれていた。水溜は中央部にあり、直径40cmの円形で深さ34cmを測り曲物が入っていた。水溜の中には大きな石が入っていた。覆土は下層まで人為的に埋められており自然堆積層はない。遺物は上層から中世土師器（36）が出土している。

**SE138** 検出面での規模は、直径1.38mの円形の掘方をもち深さ1.10mを測る。石組は1段しか残っていなかった。水溜は中央部で検出し直径50cm深さ30cmの曲物が使われている。

**SE144** 検出面での規模は1.60mの円形の掘方をもち、深さ1.50mを測る。南北方向にピットが付き覆屋があった可能性がある。石組の内径は0.90mを測り、11段積みである。水溜は直径55cm深さ10cmを測り、浅い曲物が入っていたと思われる。遺物は覆土上層から珠洲の片口鉢（22）が出土しており、SE276・122出土の遺物と接合した。

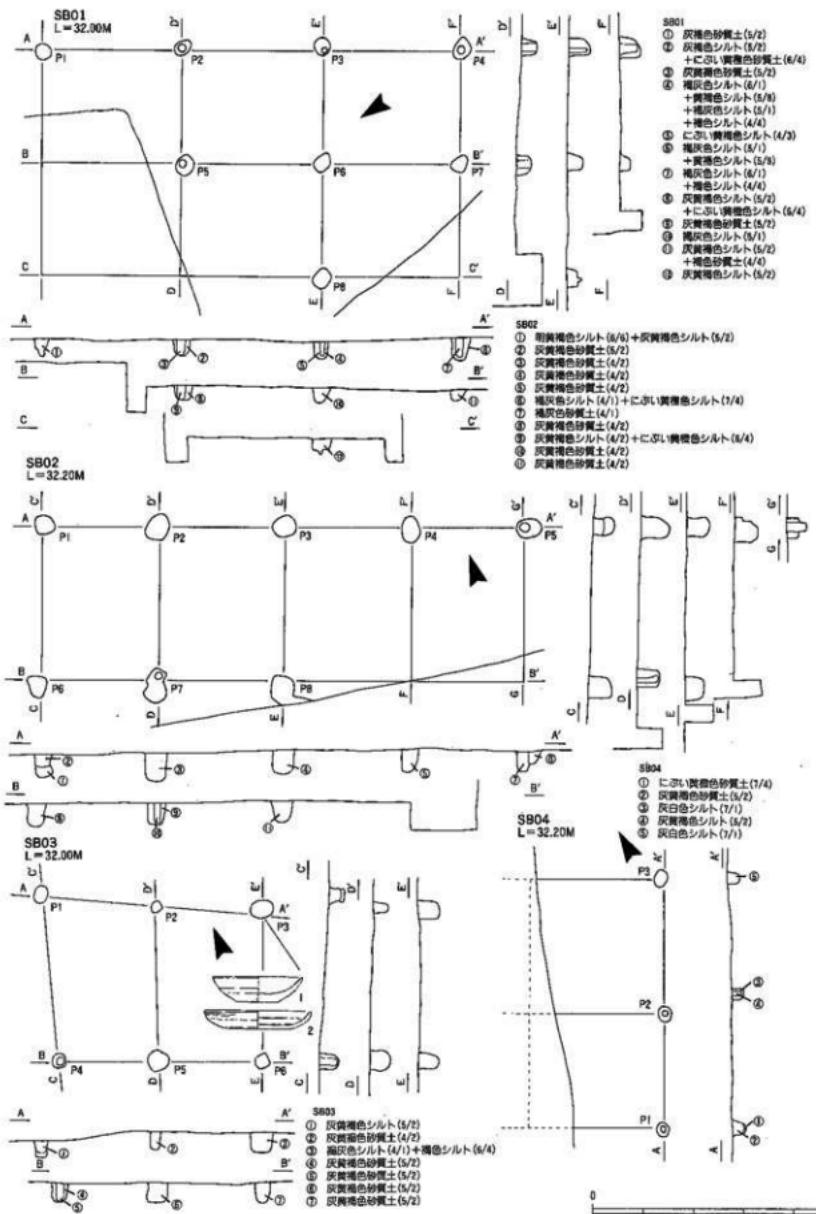
**SE228** 検出面での規模は長軸2.16m・短軸1.84mの楕円形の掘方をもち、深さ1.70mを測る。石組は内径0.6mを測り、8段積みである。水溜には直径約40cm高さ20cmの曲物が使われる。覆土は下層まで石で埋められており、井戸側の石が崩れたか廃棄時に投棄されたものであろう。遺物は珠洲の甕口鉢（12・13）が出土している。

**SE159** 検出面での規模は一辺約1.7mの隅丸方形の掘方をもち、深さ1.6mを測る。木組は一辺1.0mを測り最下層では横板材と隅柱が残っていた。井戸は基本層位の②層から掘り込んでおり時期は近世以降に属する。しかし、横板材の痕跡が①層下で止まっており、①層は別の遺構の可能性がある。遺物は覆土の②層から中世土師器（14）、珠洲の片口鉢（15）、甕腹部破片が出土している。甕の胴部片はSK154、SD141・181の出土遺物と接合した。

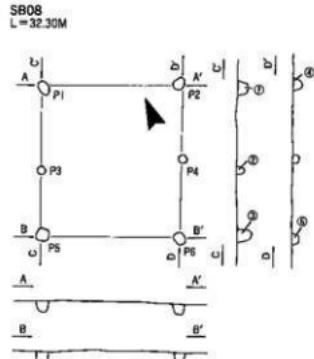
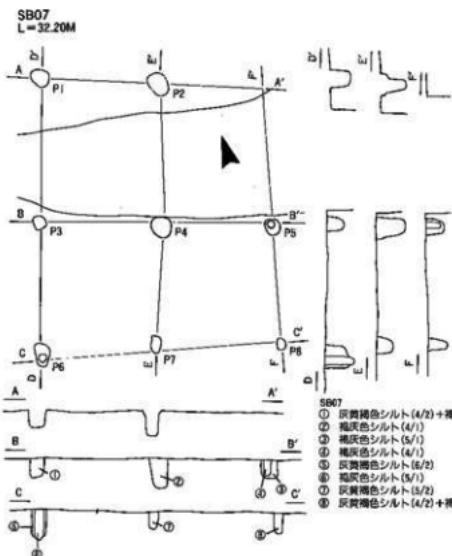
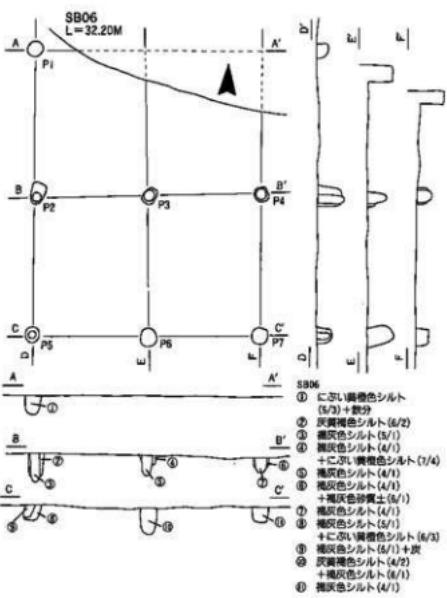
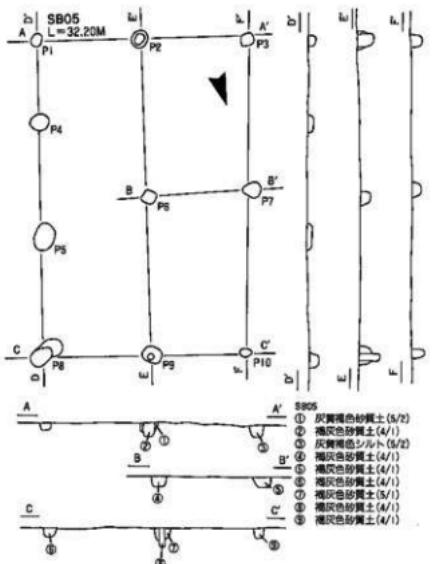


第9図 基本層位, SD122・128・224・225(1/50)



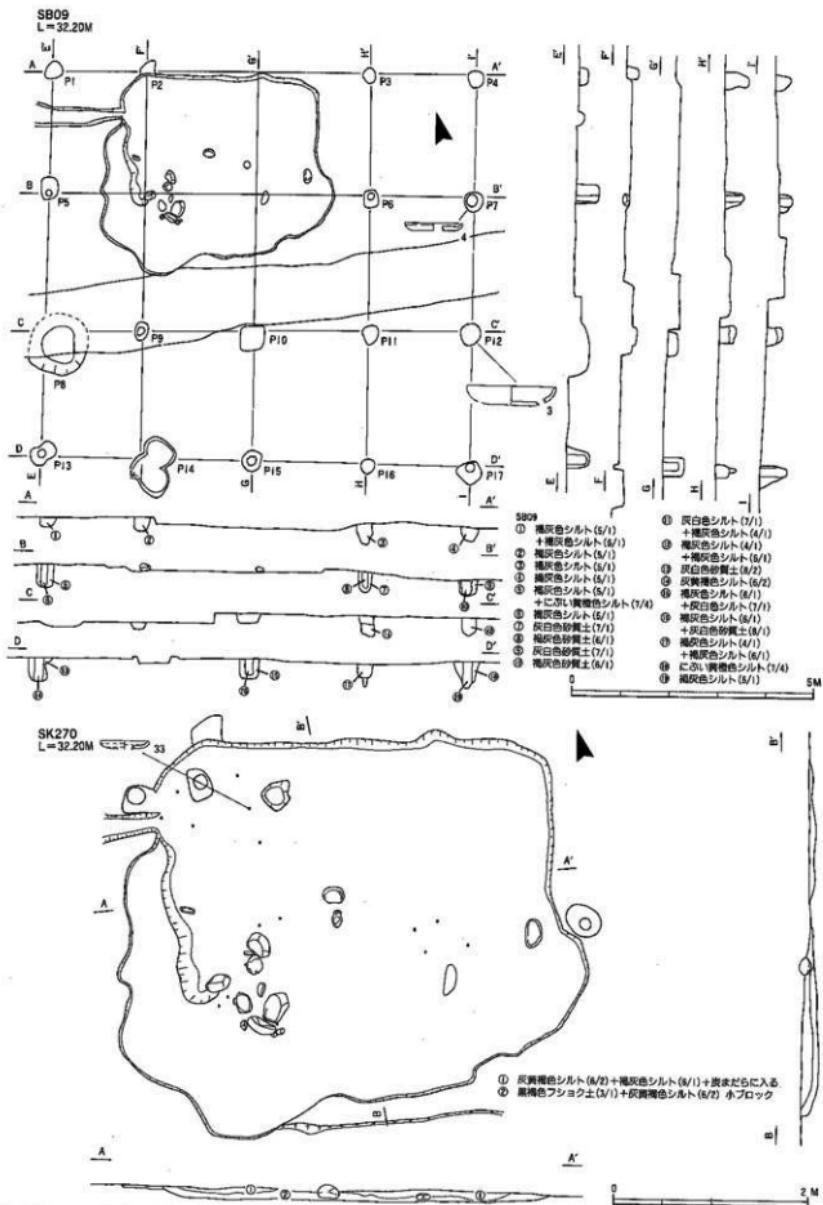


第11図 SB01・02・03・04(1/100)

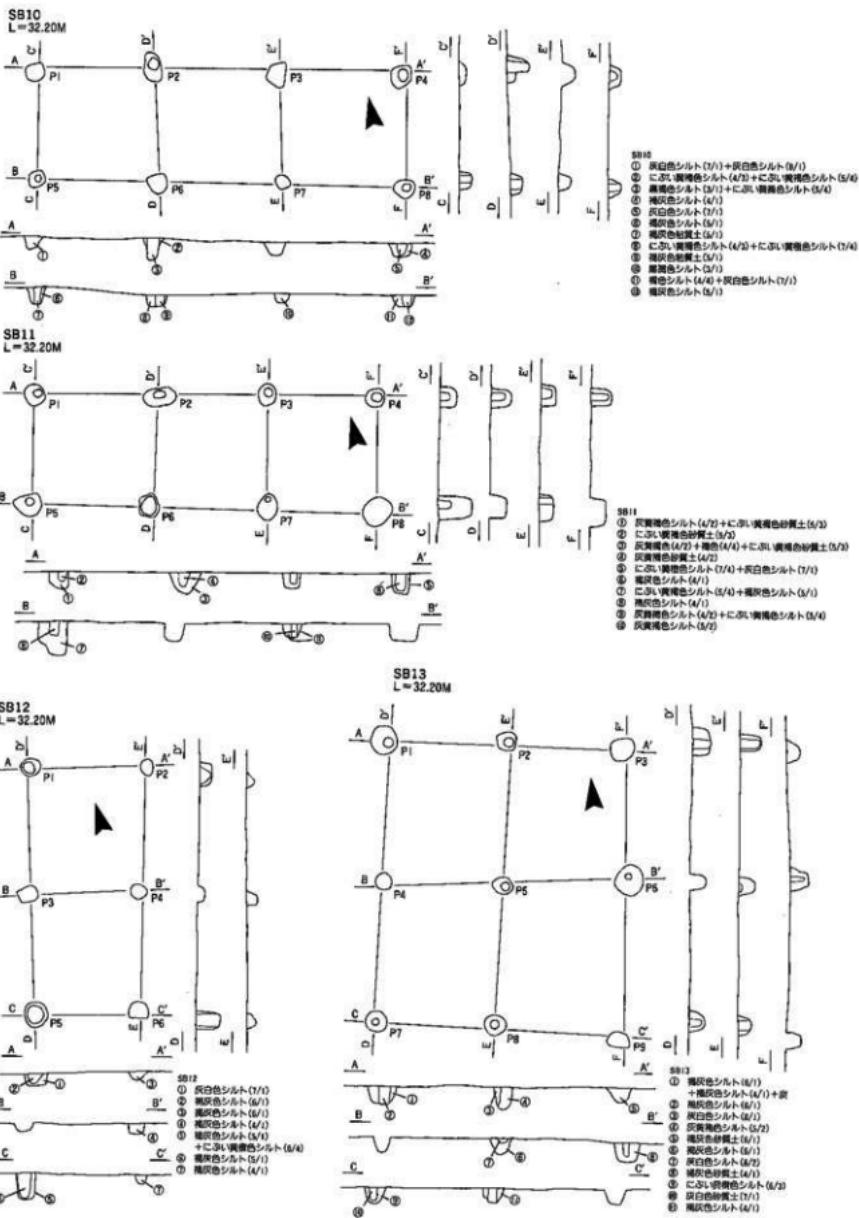


第12図 SB05・06・07・08(1/100)





第13図 SB09(1/100), SK270(1/50)



第14図 SB10・11・12・13(1/100)

(4) 溝 (第9・10図)

中世に属する溝はSD121・122・123・128・151・156・224・225・271・283・284がある。これらは3つのグループに分けられる。つまり、方形区画を形成するもの(SD121・122・123・128)、調査区を南北に流れるもの、(SD224・225)、建物・土坑に付属するもの(SD151・156・271・283・284)である。

**SD122・128** 調査区の南東部に位置し⑬層直下から掘り込む。SD122・128は幅1.0~1.4m・深さ20~60cmを測る。溝の底レベルは南東方向に下がるが断面観察では水の流れは認められない。SD122は西南部のコーナーに集石が見られた。SD128は調査区外へ延びるため不明であるがSD122は途中で切れおり、ともに区画溝の性格をもつと考える。遺物はSD122から、中世土師器(16・

17)、株洲の片口鉢(20・21・22)、瀬戸の平碗(18)・瓶子(19)が出土している。SD128からは株洲の甕(23)が出土している。

**SD121・123** 規模はともに幅約50cm深さ15cmを測る。2つの溝は続くと思われる。底のレベルは北東方向に下がり、水の流れた痕跡がある。遺物は出土していない。

**SD224・225** 調査区の中央部を真っすぐ北流し主軸方向はともにN-10°-Eを測る。後述するSD141とほぼ平行して流れ、この3条の溝を境にして東側は一段落ち込んでいる。SD224は幅約1m深さ40cmを測り、SD225は幅約0.8m深さ40cmを測る。覆土はすべて水堆積の自然堆積層であった。⑬層上面から掘り込まれ、切り合い関係を持ちSD225が新しい。遺物は少なくSD224から鉄滓が、SD225からは中世土師器が出土している。

**SD155・156** ともに⑬層上面から掘り込まれている。SK151・154に付属し、ともに幅20cm深さ10cmを測る浅い溝である。溝の底レベルは東方向に下がる。SD156は主軸方向がSD224・225に直行している。出土遺物はない。

**SD271** ⑬層上面から掘り込まれている。SK270に付属し、ともに幅20cm・深さ10cmを測る浅い溝である。溝の底レベルは西方向に下がる。溝とはほぼ平行して現代の田園の区画溝が走りかなり擾乱を受けている。主軸方向はSD224・225に直行している。遺物は中世土師器が出土している。

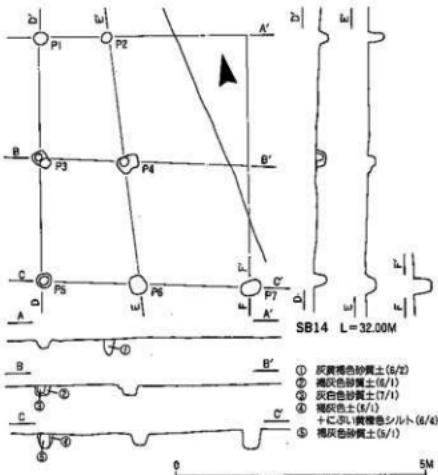
**SD283・284** 他の溝より古く、ともに⑬層直下から掘り込む。ともに幅20cm深さ10cmを測る浅い溝である。SD283は主軸方向をN-49°-Wにとり、溝の底レベルは北方向に下がる。SD284は主軸方向をN-12°-Eにとり、溝の底レベルは東方向に下がる。共に出土遺物はない。

(5) 土 坑 (第17・18図)

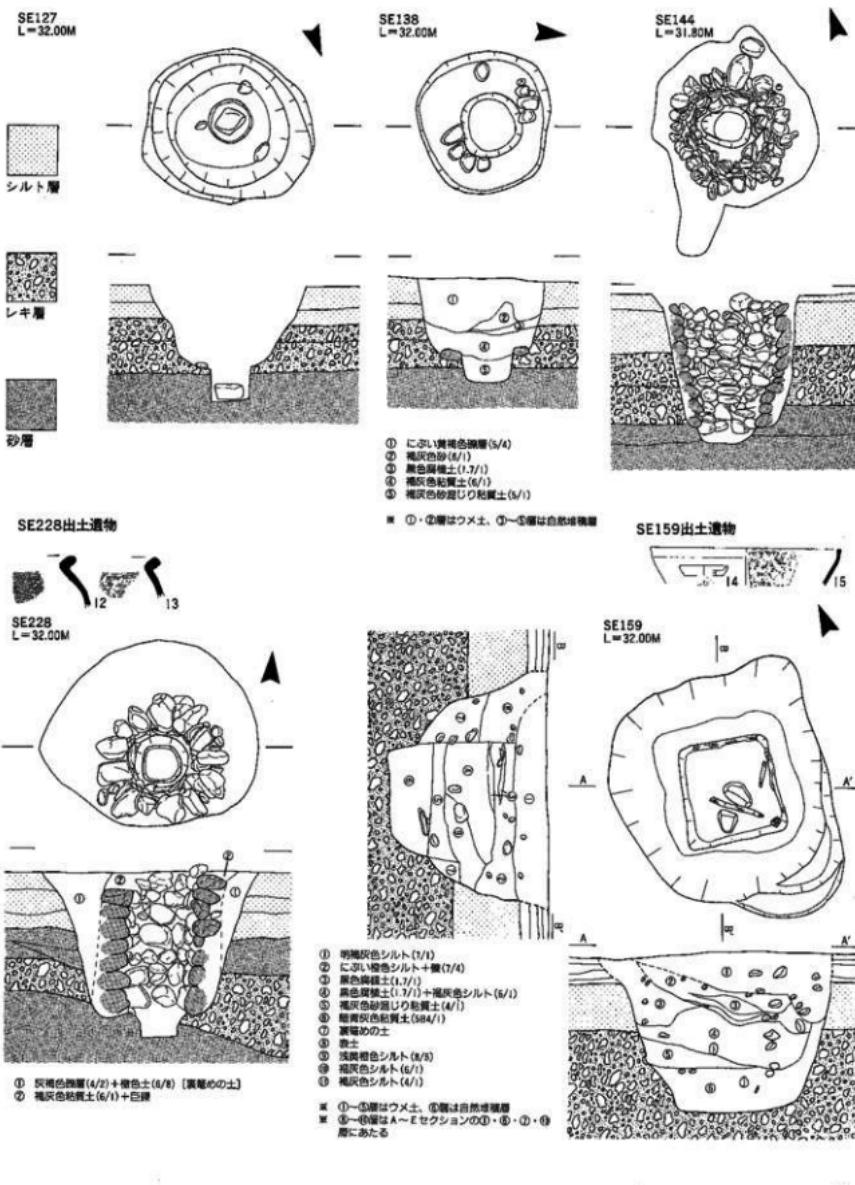
土坑は調査区全域で検出した。性格の分からぬるものもあるが、建物に付属するもの・作業場・ゴミ穴の可能性をもつものがある。建物に付属する土坑は建物の項で述べている。

**SK97・223** ともに⑬層直下から掘り込み、SK97は1辺約1.5mの構丸方形を呈する。深さは40cmを測る。SK223は直径約1.8mの円形を呈する。深さは60cmを測り、スリ鉢状を呈する。ともに出土遺物はない。

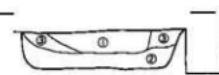
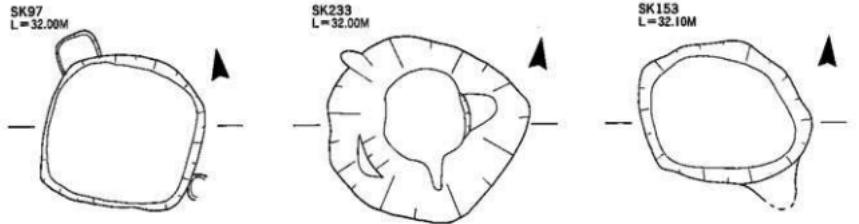
**SK153** ⑬層上面から掘り込まれている。長軸約1.8mの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土は疊が交じり、人為的に埋められておりゴミ穴の可能性がある。



第15図 SB14(1/100)



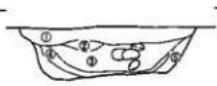
第16図 SE127・138・144・228・159(1/50)



① 淡灰褐色シルト(6/1) + 深灰褐色シルト(8/2)  
② 深灰褐色シルト(6/1) + 灰白色シルト(4/2)  
③ 深灰褐色シルト(6/1)

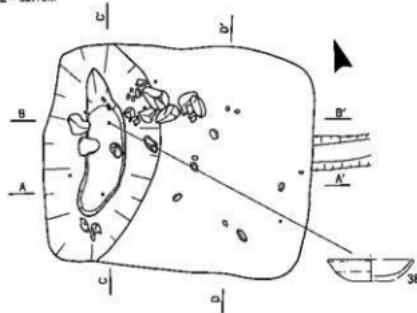


① 深灰褐色シルト(4/2)  
② 灰白色粘土(6/1)

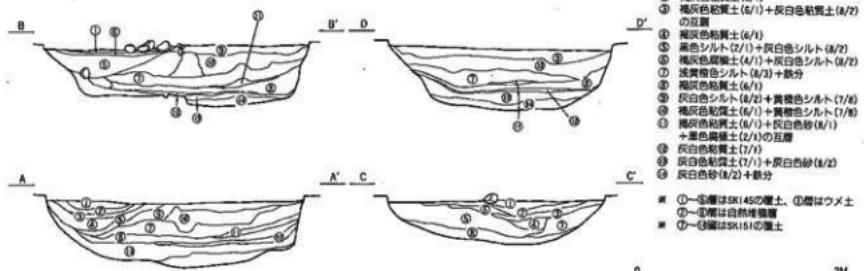
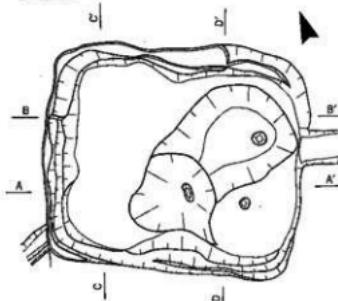


① 淡黄褐色シルト(6/1) + 鉄分  
② 深灰褐色シルト(5/1) + 鉄  
③ 灰白色粘土(5/1) + 灰白色粘土(8/2)  
④ 深灰褐色シルト(6/1)  
⑤ 灰白色粘土(3/1)

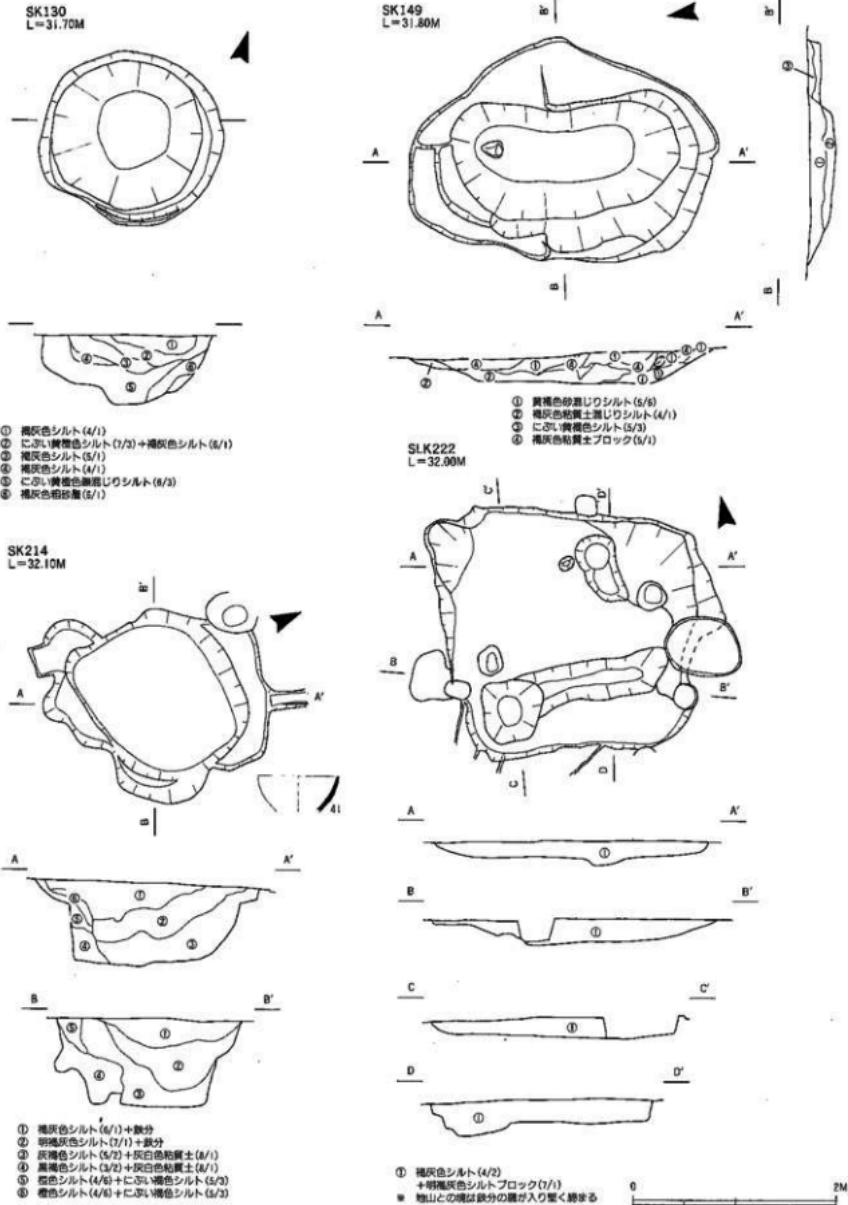
SK151・154  
L=32.10M



SK151  
L=32.10M



第17図 SK97・233・153・151・154(1/50)



第18図 SK130・149・214・222(1/50)



第19図 小倉中稻遺跡C地区遺構配置図及び遺構断面図(近世以降)

\*造構配置図(1/200)造構断面図(1/50)

SK151・154 ⑬層上面から掘り込まれている。切り合ひ関係を持ちSD151が新しい。SD155が西方から流れこみ、SD156が流れ出す。SK154は長軸2.1m・短軸2.5mの隅丸方形を呈し、深さ70cmを測る。覆土は水堆積の層が見られ、ゆっくりと埋没していった様子がうかがえる。SK154が埋没した後SD151が造られる。SK151は長軸2.1m・短軸1.1m、深さ40cmを測る。覆土は水堆積の層が見られ腐植土が堆積し、ゆっくりと埋没している。性格はともにゴミ穴の可能性がある。遺物は珠洲の斐洞部片・白磁が上層から出土している。SK154では下層から中世土師器(38)・珠洲斐洞部片が出土している。

SK130 ⑭層直下から掘り込む。長軸約1.7mの円形を呈し、深さは80cmを測る。

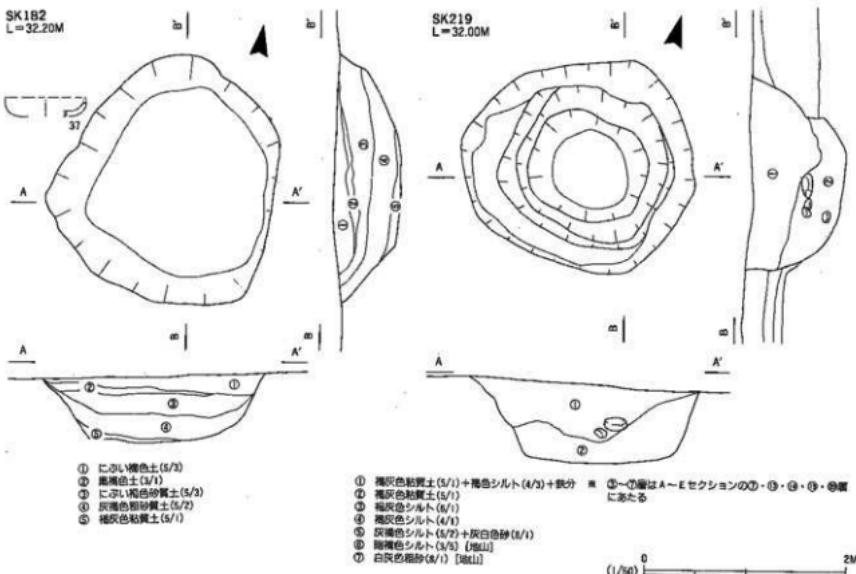
SK149 ⑭層直下から掘り込む。長軸3.0m・短軸1.7mの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土は南側から入りこむ。

SK214 ⑯層上面から掘り込まれる。一辺約1.6mの隅丸方形を呈し、深さは80cmを測る。遺物は中世土師器・珠洲の片口鉢(41)が上層から出土している。

SK222 SD122・128が構成する方形区画内にあり、⑭層直下から掘り込む。一辺約2.5mの隅丸方形を呈し、深さは20cmを測る。壁面は直角に立ち上がり、床面は平らで酸化鉄の層があり仰床のようにかたく締まる。ピットを4基、穴を1基もつ。覆土は単層である。出土遺物はないが、簡単な覆屋構造をもつ作業場的な性格が考えられる。

#### (6) サク状造構(第9・10図)

サク状造構は調査区の南西部と北西部で検出し、⑭層直下から掘り込む。主軸方向は概ねN-30°-Wを向き、ほぼ1.2mおきに規則的に掘られている。規模は幅40~50cm深さ



第20図 SE276, SK182・219(1/50)

5 cmを測る。覆土は灰白色シルトの単層(⑩層)である。A・Bセクションではサク状遺構と交互に褐灰色砂質土とにおい黄橙色シルトの混合層(⑪層)が認められ、この部分は畠の畝の部分と考えられる。

#### (7) 近世以降の遺構(第19・20図)

近世以降の遺構は基本層位の⑦～⑫層上面から掘り込まれる遺構で溝、井戸、土坑、サク状遺構などがあり、全体的に遺構密度は疎らである。SD141・223は調査区の中央部を真っすぐ北流し主軸方向はともにN-10°-Eを測る。切り合ひ関係を持ちSD223が新しい。SD181はSD141に直行している。これらの溝は用排水としての性格をもつと思われる。SE276は②層上面から掘り込む。直径1.3m深さ1mの素掘りの井戸である。遺物は下層から珠洲の片口鉢(22)が出土しSD122・SE144出土の遺物と接合した。大型の土坑はSD141の周辺に分布し、溝と関連する可能性がある。SK182は直径2.5mの不定形を呈し、深さ65cmを測る。覆土は上層から水堆積が見られた。出土遺物はない。SK219は直径2.0mの不定形を呈し、深さ90cmを測る。下層には石が投げ込まれている。出土遺物はない。サク状遺構は調査区の南部で検出した。主軸方向はN-21°-EではなくSD141・223に平行する。遺構は1mおきに規則的に掘られ、規模は幅40～50cm・深さ5cmを測る。中世のサク状遺構と同様、畠のサクの部分と考える。

## 2. 遺物(第21～27図)

今回の調査で出土した遺物は中世土師器、八尾・珠洲・越前・常滑・輸入陶磁器、石製品(砥石・硯)、木製品、鐵津がある。遺構から出土したものは少なく、多くは包含層出土である。遺物量が少ないため、遺構・包含層に關係なく器形が判るものに関しては出来る限り図化し、載せることに努めた。記述の方法は遺構出土の遺物は遺構ごとに載せた。包含層出土の遺物は器種ごとに分け、量の多い中世土師器は基本層位に従い、上層(①～⑤層)・中層(⑦～⑫層)・下層(⑬層)に分けて載せた。また、中世土師器はロクロ成形(A類)と非ロクロ成形(B類)に分け、口縁・全体的な形態から以下のように分類した。

### ロクロ成形(A類)

A 1類 体部が軽く内済して立ち上がるもの。器種は大小がある。

A 2類 A 1より大きな底部を持ち底部の器壁は薄い。口縁部まで残るものはないが、大型の皿か碗である。

A 3類 短い体部が垂直に立ち上がる。内面には強い指押しによる溝が回る。口縁部は軽くナデ、丸くおさめる。底部には糸切り後乾燥時に付いたと思われる平行な数本の線状痕が残る。

A 4類 体部が内済しながら立ち上がるもの。B 2の口縁形態と似ており、口縁部だけでは区別しがたい。

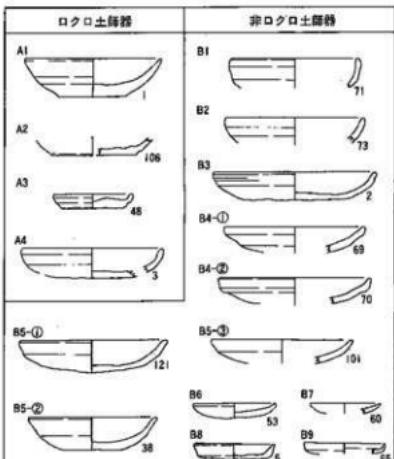
### 非ロクロ成形(B類)

B 1～4は2段ナデを施すもの、B 5～9は1段ナデを施すものである。

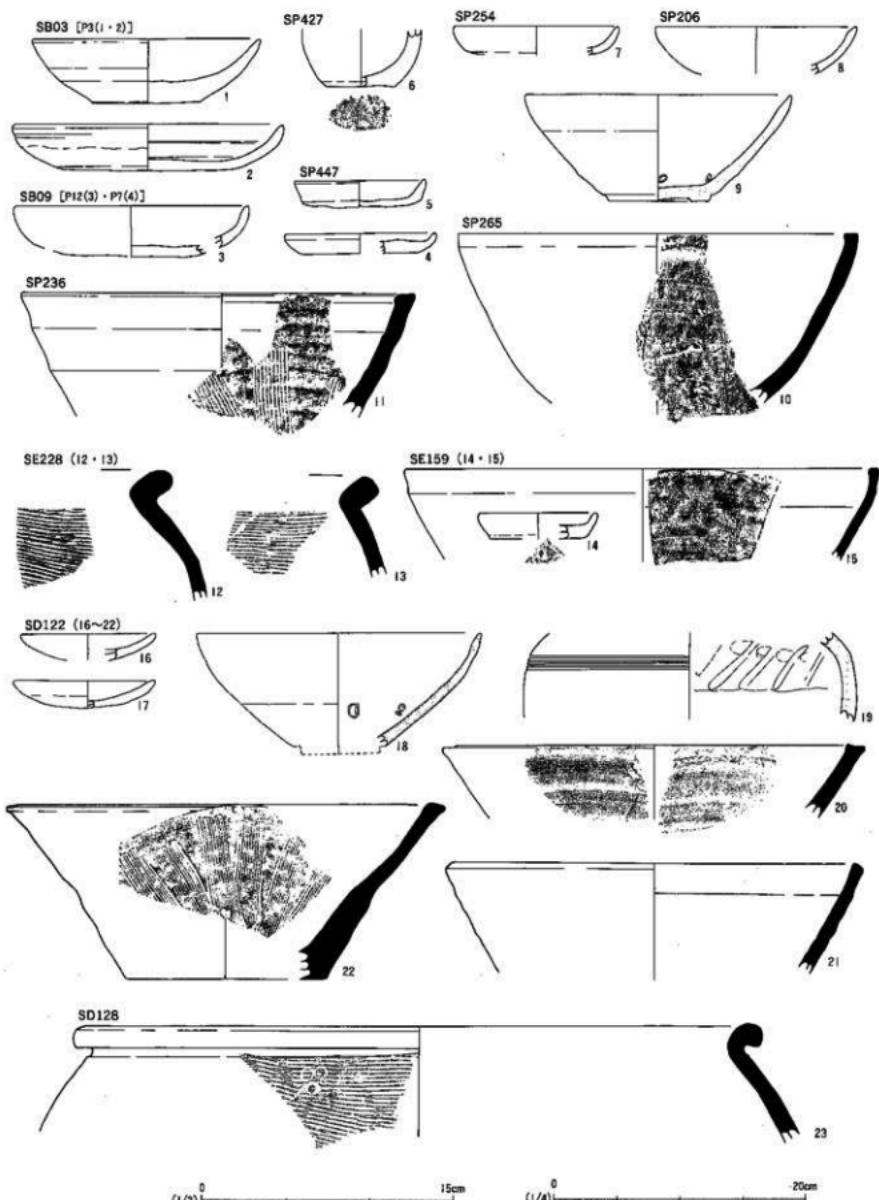
B 1類 体部がやや内済し、幅の広い2段ナデを施す。

B 2類 体部がやや内済し端部が丸い。

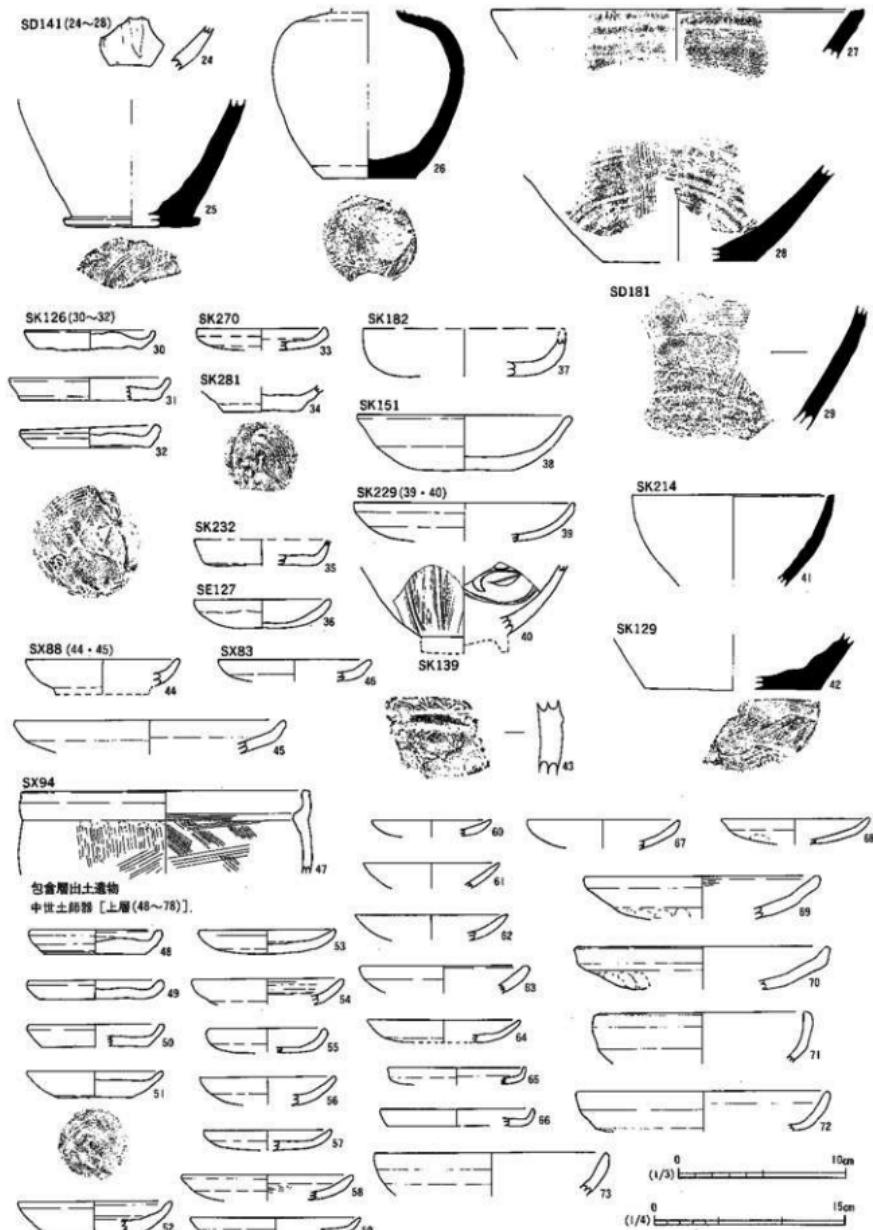
B 3類 口縁部に狭い2段ナデを施し端部には爪で沈線が回る。



第21図 中世土師器分類



第22図 出土遺物実測図 (1/3, 10~13・15・20~23は1/4)



第23図 出土遺物実測図(1/3, 25~29・41・42・47は1/4)

- B 4 類** 体部はゆるく立ち上がり端部をつまみ上げるようにナデる。下段のナデの幅により、広いもの—①、狭いもの—②に分けた。
- B 5 類** やや外反した体部を持ち口縁に1段ナデを施す。さらに、ナデの幅が広く外反するもの—②、ナデは軽く器形が浅いもの—③に分けた。③の器種には大小がある。
- B 6 類** 軽い1段ナデと端部に面取りを施す。
- B 7 類** 口縁に軽いナデを施す。底は丸い。
- B 8 類** 短い体部が垂直に立ち上がる。形態はA 3に似る。
- B 9 類** 短い体部が垂直に立ち上がる。B 8 類と比べ口径が大きく、器壁は薄い。

#### (1) 捩立柱建物

**SB03** 1・2 (SP3) は中世土師器である。1はA 1 類の大型品で口径13.6cmを測る。2はB 3 類で口径16.2cmを測る。2の内面は木口のハケで調整後、磨きが施される。双方とも焼成は良好である。

**SB09** 3・4 (SP12・7) は中世土師器で、3はA 4 類で口径14.0cmを測る。4はA 3 類で口径9cmを測る。

#### (2) 柱 大

5 (SP447) はB 8 類で口径8cmを測る。6 (SP427) は土師質の壺の底部と思われる。底部糸切りで底径4cmを測る。胴部には丁寧なロクロナデが施される。7 (SP254) はA 4 類で小破片のため口径は不正確であるが約10cmを測る。8 (SP206) は下層から出土している。A 4 類で口径は約10cmを測る。9 (SP275) は瀬戸の平碗で灰釉がかかり、内面にはトチンの跡が残る。古瀬戸後期様式編年表 [藤沢1990] の後II期にあたる。包含層出土 (X 6 Y22⑤層) と接合した。10 (SP265) は珠洲のIII期の片口鉢である。包含層出土 (X23Y16③層) と接合した。11 (SP236) は珠洲のIV期の片口鉢である。包含層出土 (X10Y25③層) と接合した。

#### (3) 井 戸

**SE228** 12・13は珠洲の甕口縁部で、ともにV期にあたる。12は上層から出土している。13は最下層から出土したが同造構の上層から出土した珠洲と接合した。図示しなかったが井戸の最下層から板材が出土している。

**SE159** 14は中世土師器でA 3 類、口径8cmを測る。15は珠洲のII期の片口鉢である。この他、図示しなかったが上層から珠洲の甕の胴部片が出土している。内面には調整時につけたと思われる爪の跡が一面に付く。同一個体と思われる破片がSK154、SD141・181、包含層①～③⑦層から出土している。

**SE128** 23は珠洲の甕口縁部でIII期に属する。外面の肩部には竹管文で刻印が捺される。

#### (4) 潟

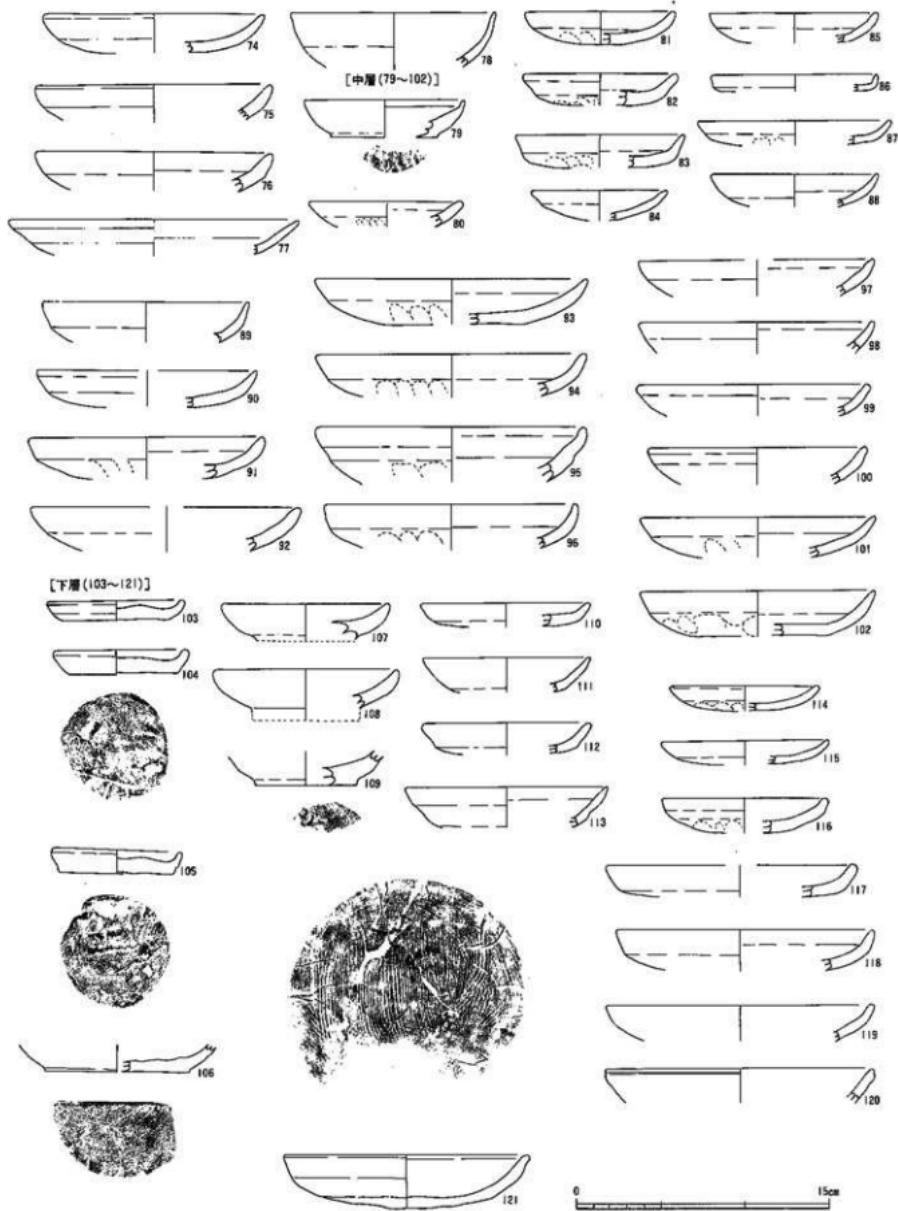
**SD122** 16・17は中世土師器とともにB 7 類である。16は内面に、17は内外面にタールが付着している。口径は16は8.1cm、17は8.6cmを測る。18は瀬戸の平碗で灰釉がかかり、内面にはトチンの跡が残る。古瀬戸後期様式編年表の後II期にあたる。包含層出土 (X19Y29SD18L上面) と接合した。19は瀬戸の灰釉の瓶子の肩部で4条の横目直線文が入る。20・21・22は珠洲の片口鉢で20・22はIV期、21はIII期にあたる。

**SD141** 24は青磁で蓮弁文をもつ。25・26・27・28は珠洲で、それぞれ瓶の底部、小壺の底部、片口鉢の口縁部・底部である。26の肩部には横目の波状文が描出される。25は包含層出土 (①層) と接合した。26はSD181・包含層出土 (①層) と接合した。

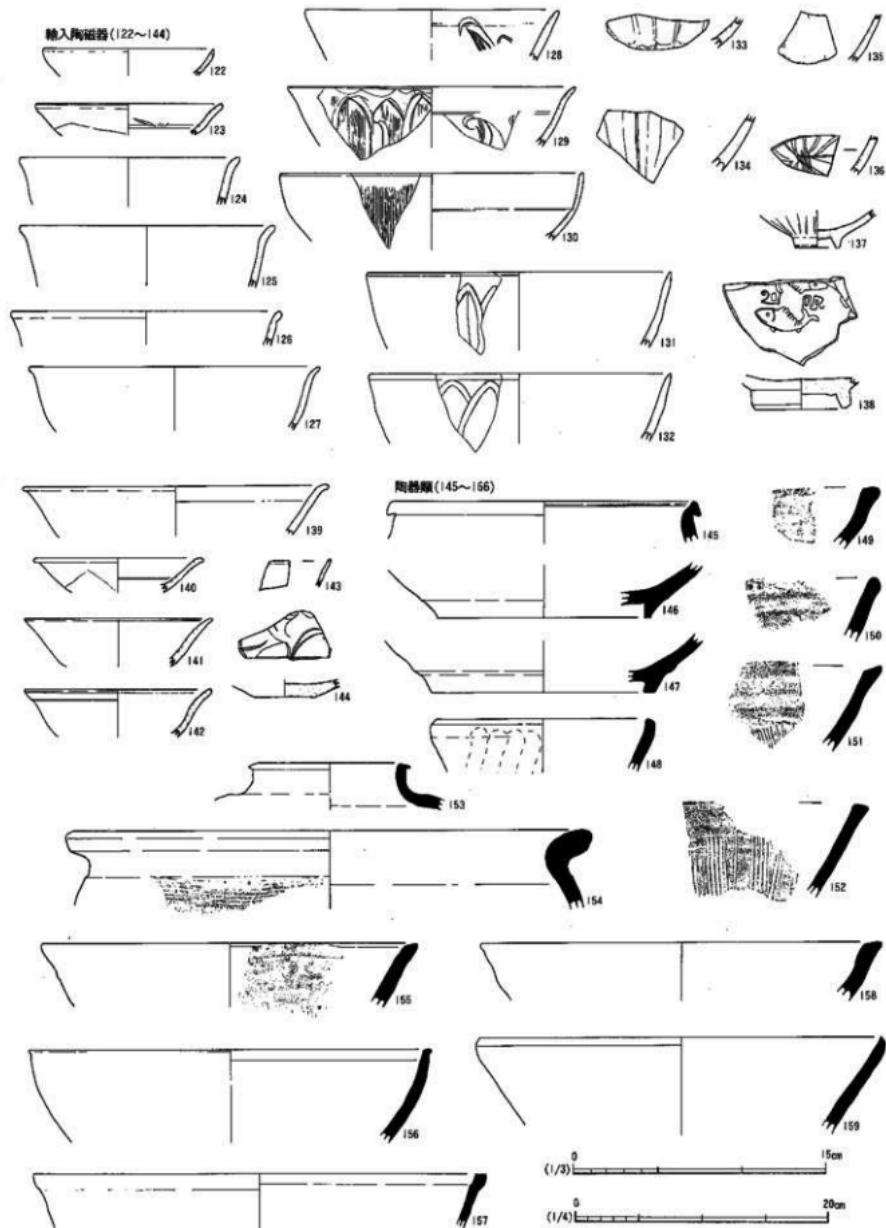
**SD181** 29は珠洲のII期の片口鉢である。下部には使用痕が残り、オロシ目がすり減っている。

#### (5) 土 坑

30～39は中世土師器である。30・31・32 (SK126) はA 3 類で口径8cmを測る。33 (SK270) はB 6 類で口径7.7cmを測る。34 (SK281) はA 1 類の小型品である。35 (SK232) はB 8 類である。36 (SK232) はB 6 類で口径8cmを



第24図 出土遺物実測図(1/3)



第25図 出土遺物実測図(1/3, 122~144, 1/4, 145~159)

測る。37 (SK182) は体部が強く屈曲しており碗状を呈する。38 (SK154) はB 5類②で口径13cmを測る。丁寧なナデが全体に施される。底部は使用のため磨耗している。39 (SK281) はB 4類①で体部はやや屈曲して立ち上がる。40は龍泉窯系青磁の碗I類-6である。41 (SK214) は珠洲の片口鉢でⅠ期にあたる。42 (SK129) は片口鉢の底部で糸切り痕を残す。43 (SK137) は瓦賀の火鉢で上部に刻線文を施す。

#### (6) サク状造構

造構自体が浅いため粉れ込みが多く、造構の時期を示すと思われる遺物は少ない。なお遺物が出土したサク状造構は近世以降に属する。44・45 (SX88) はともに中世土師器で44はA 1類の小型品、45はB 5類③である。46 (SX83) 中世土師器でB 5類③の小型品である。47 (SX93) は古代の土師甕の口縁である。時期は8世紀中頃と思われる。

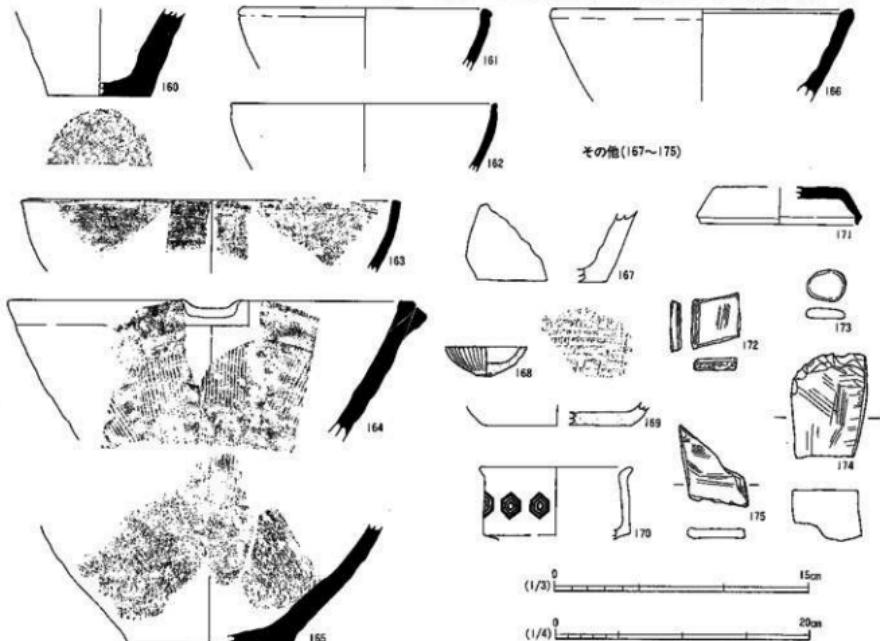
#### (7) 包含層出土遺物

包含層は先に述べたように大まかに3時期に分けられる。上層の遺物分布は、調査区の南東部と北西部に集中しながらほぼ全城に分布している。中層は調査区中央部のSB09付近と南東部の方形区画の2ヶ所に集中部分がある。下層は調査区北部のSB06・07と南部のSB02・05付近に集中している。上層の遺物分布は近世以降の耕作による影響と考えられるが、中・下層については該当時期の造構分布と一致している。

##### a 中世土師器

図化した中世土師器は72個体で、上層32個体・中層22個体・下層18個体である。上・中層ではB 5類が最も多く下層ではA 3類が多い。A 3類は他の土師器と違い完形に近い形でまとまって出土した。以下層位ごとに述べる。

上層 B 5類が多く全体の32%を占める。とくにB 5類③が多い。A 1類は51・52。A 3類は48・49・50。A 4類は78。B 1類は71・72。B 2類は64。B 3類は73・75。B 4類①は70・71、②は69。B 5類①は54・77・102、③は55・59。



第26図 出土遺物実測図(1/4.160~166, 1/3.167~175)

63・101。B 6 類は53。B 7 類は60・62・67・68。B 9 類は65・66。

中層 B 5 類が多く全体の63%を占める。とくにB 5 類③が多い。A 1 類は79。B 2 類は89。B 3 類は99・100。B 4 類①は91・94。B 5 類①は83・95、③は81・84・85・87・88・90・92・93・96・98・101。B 6 類は80・82。

下層 A 3 類が多く全体の28%を占める。A 1 類は107・109。A 3 類は103・105・110・120。B 2 類は111・119。B 4 類①は113。B 5 類①は112・121、③は114・115・118。B 7 類は117。121の内面には木口のハケによる調整が施される。

#### b 輸入陶磁器

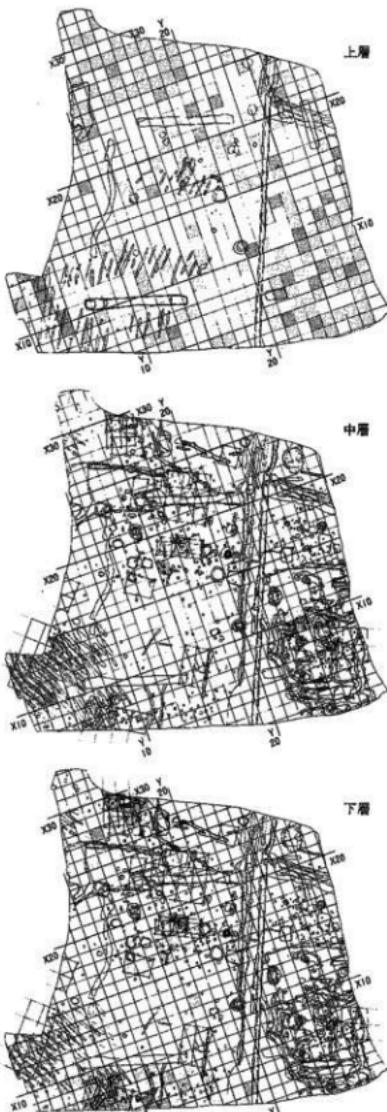
122~139が青磁、139~144が白磁で、多くが①~⑤層出土である。青磁はほとんどが龍泉窯系で同安窯系は130のみである。122は⑦層出土。123は皿で、釉は青味を帯びた灰色を呈する。124~127は碗で口縁部が外反する。128・136は楕のI類-2、内面に草花文を有する。129・134は蓮瓣弁文を有するもので楕I類-1である。釉は青味を帯びた緑色を呈する。134は昨年度調査したB地区のSK57出土の青磁と接合した。131~133は蓮弁文を有する楕I類-5。135は皿もしくは杯のIII類である。137は小楕III類-2 bである。138は見込みに双魚文のスタンプを有する。139は⑦層出土で皿のV類-4である。140は⑩a層出土の皿III類で見込みの釉を搔き取っている。141・142は口ハゲの皿IX類である。144は⑩a層出土、VII類-1で見込みに草花文を有する。

#### c 陶器類

ほとんどが①~⑤層出土である。145は瓷器系陶器の口縁部。146・147は常滑の鉢の底部である。146は⑩a層から出土している。148は八尾の小型の鉢である。153・160は珠洲の壺の口縁部と底部である。154は珠洲の壺口縁部でV期にあたり。149~152・155~159・161~165は珠洲の片口鉢で156・161・162・163はI期、159はII期、157はIII期、149~152・155・158・164~166はIV期にあたり。161は⑩a層から出土している。

#### d その他

167・170は瓦質の火鉢と香炉。168は伊万里の紅皿。169は瀬戸のオロシ皿。171は須恵器の壺蓋。172・174・175は砥石、173は基石と思われる。



(高梨) 第27図 包含層出土遺物分布図

V D地区

### 1. 遺構(第27・28図)

調査によって検出した主な遺構は溝状遺構6条、土坑、ピットである。

### (1) 基本層位 (第27図)

基本層位は①層：耕作土、②層：中世の遺構、④⑦層：遺構構築面である。遺物包含層はない。

造構構築面のレベルは調査区南側に比べて、北側がやや高くなり造構が集中して見られた。

X 4～2・Y-20にかけてトレンチを設定したところ、③～⑥層が②層に潜り込んでいるのを確認した。これは埋没河川の覆土であり、中世以前の岬川の旧河道であると考える。左岸は調査区外に延び、確認できなかった。周辺の地形から見てこの川は北流していたと考え得る。

(2) 土 坑 (第28図)

調査区の北側に集中する。とくに、覆土内に炭化物を含むものは、調査区の北東に偏って分布する。

SK501 円形を呈し、直径60cm、深さ15cmを測る。覆土はにぶい褐色の単層で炭化物が混じる。遺物は中世土器(1)が出土した。

**SK502** 円形を呈し、直径50cm、深さ15cmを測る。覆土はにぶい褐色の単層で炭化物が混じる。

**SK503** 不定形を呈し、長軸80cm、短軸50cm、深さ10cmを測る。覆土はにぶい褐色の単層で炭化物が混じる。

**SK504** 円形を呈し、直径50cm、深さ15cmを測る。覆土はにぶい褐色の単層で炭化物が混じる。

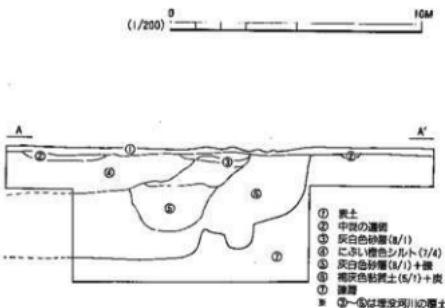
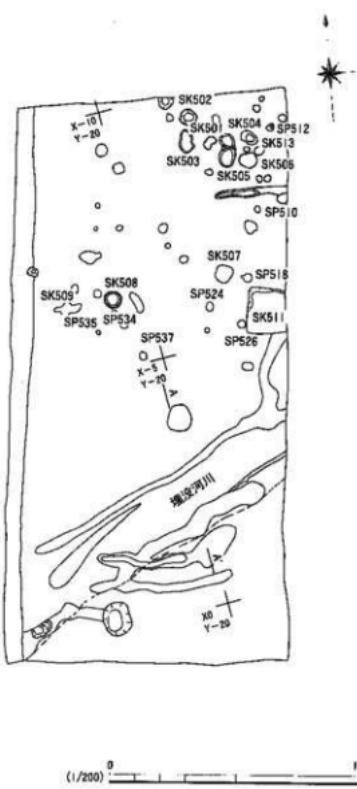
**SK505** 椎円形を呈し、長軸75cm、短軸60cm、深さ15cmを測る。覆土はにぶい褐色の単層で炭化物が混じる。遺物は中世土師器(2)が出土した。

**SK508** 楕円形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。覆土はにふい褐色の単層で炭化物が混じる。遺物は中世土師器(3)が出土した。

**SK507** 凹形を呈し、直径70cm、深さ20cmを測る。

**SK508** 円形を呈し、直径70cm、深さ25cmを測る。

**SK509** 不定形を呈し、長軸115cm、短軸50cm、深さ



第28図 小倉中稻遺跡D地区遺構配置図

20cmを測る。20cm~40cmの凹みが4つ並ぶ。

**SK511** 調査区の東端に位置する大型の土坑である。方形または長方形を呈し、1辺約2m・深さ30cmを測る。西辺はSP526と接し、北辺はSD539を切っている。遺物は中世土器、白磁(4)が出土した。

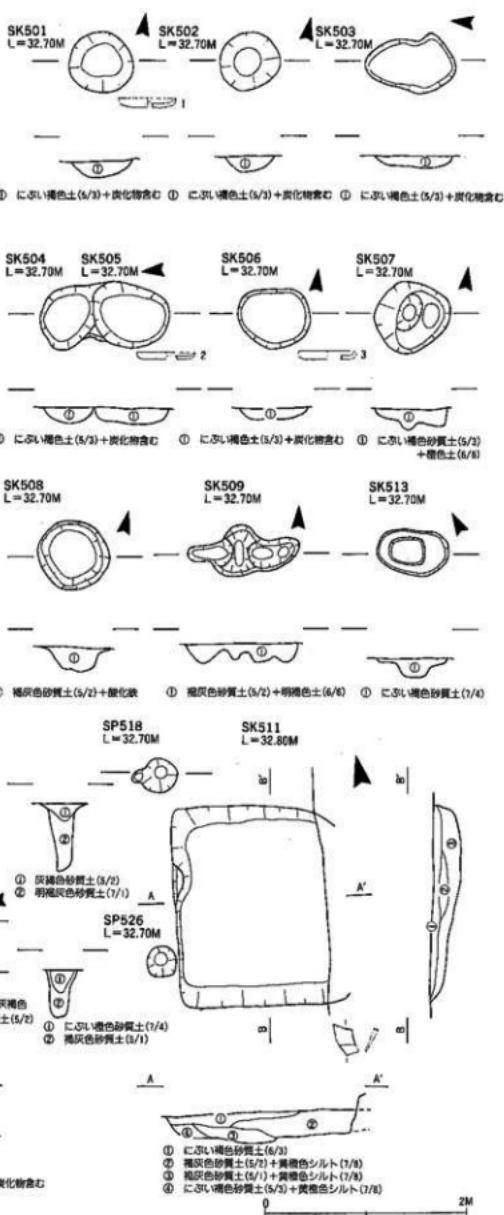
**SK513** 椭円形を呈し、長軸70cm・短軸45cm、深さ20cmを測る。中央に長軸35cm・短軸25cmの隅丸長方形をした凹みがある。

### (3) ピット (第28図)

調査区北側に集中して分布する。ピットは15~20cm程度の浅いものと40~70cmを測る深いものに大別される。

浅いものはさらに、①底の平たいもの (SP534・537)、②底が緩やかに丸みをもつもの (SP510・535)、底にゆくにつれ幅が狭くなるものに分けられる。それぞれ、①は深さ20~25cm・直径15~20cm、②は深さ15~25cm・直径20~40cm、③は深さ25~40cm・直径10cmを測る。

同様に深いものも前述の3種 (①SP512、②SP524、③SP518・526) に分けられる。それぞれ、①は深さ40~50cm・直径25cm、②は深さ40cm・直径30cm、③は深さ45~70cm・直径20~25cmを測る。③の2つのピットは、SK511のすぐ西に位置し、この土坑となんらかの関連が考えられる。



第29図 SK501~509・513・511, SP510・512・518・524・526・534・535・537(1/50)

## 2. 遺物 (第29・30図)

今回の調査で出土した遺物は、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、輸入陶磁器である。X 2～3・Y 21で遺物の集中が見られる。なお記述は遺構ごとに行なう。

### (1) 土 坑

- SK501 1は中世土師器でB 9類、口径7cm・器高1.1cmを測る。
- SK502 2は中世土師器でB 9類、口径7cm・器高0.8cmを測る。外底部には煤が付着している。
- SK506 3は中世土師器でB 9類、口径7cm・器高1.0cmを測る。口縁部は短く、内側に折れ込む。口縁内側には煤が付着している。
- SK511 4は白磁で内外面に施釉され、上部に向かい器壁が厚くなる。器形は判らないが碗か皿と思われ、内面には沈線がめぐる。

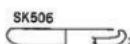
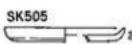
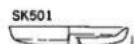
### (2) 遺構外出土遺物

- 5～12は中世土師器である。5～7はB 9類で口径7～8cmを測る。8はB 5類③の小型で口径9cmを測る。9・12はB 2類で、水簸されたきめ細かい胎土で丁寧に作られる。9は内面に木口のハケ、12は布のようなものでナデる。底部には乾燥時に付いたと思われる平行な線状痕が残る。13は珠洲の壺でⅡ期にあたる。14は姿器系陶器の壺の腹部である。胎土は粗く黒色粒を含み灰色を呈する。調整方法は八尾の調整方法と似ており、丁寧で内面には木口による横方向のハケ目痕が残り、外面には下から上方向に木口で搔き上げたハケ跡が明瞭に残る。

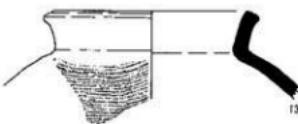
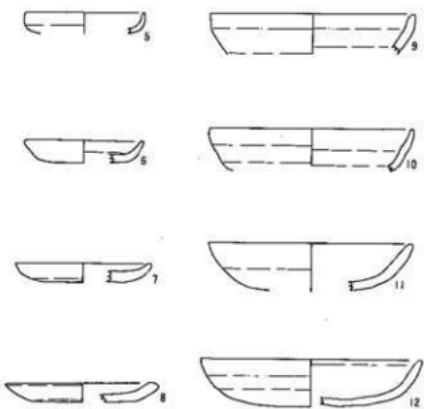
(片岡)



第30図 包含層出土遺物分布図



遺構外出土遺物(5～14)



(1/3) 0 15cm  
(1/4) 0 20cm

第31図 出土遺物実測図(1/3, 13・14は1/4)

## VI まとめ

今年度調査した3地区を遺構・遺物に分けまとめたのち、昨年度の調査を含めて概観し全体のまとめとする。

### 1. 遺構

#### (1) B1地区

当地区は昨年度調査したB地区の西側に位置している。調査区の中央部には埋没河川が東流しており、昨年度の報告でB地区的SB01の整地層とした、III・IV層（III層は今年度の⑧⑨層、IV層はない。）は埋没河川の上層覆土と訂正する。B1地区SB01は⑨層上面から掘り込み、B地区的SB01より検出面は1層下である。昨年の調査で、B地区的SB01は13世紀初めとしておりB1地区的SB01は12世紀中頃～後半と考えられる。SB01と02は主軸方向をほぼ同じにするため同時期の可能性がある。

#### (2) C地区

##### a ピット（第31図・表3）

C地区では約40基のピットを確認した。ここで言うピットとは建物の柱穴も含み、平面形が円もしくは梢円を呈し、壁面が垂直に立ち上がり、下層まで人為的に短期間で埋められた痕跡のあるものを指す。覆土に自然堆積層が認められたものは形態的に合致しても土抗とした。なお、建物を構成するピットは柱穴と呼ぶ。建物を構成する柱穴は88基で14棟の建物を復元した。ピットはその断面形態から大きく3タイプに分類し、柱痕痕跡の有無とその形態で細分し15タイプに分けた。

Aタイプ 底面が平らで断面形が台形もしくは長方形を呈するもの。

Bタイプ 底面が丸もしくは尖り、断面形が三角形を呈するもの。

Cタイプ ピットの壁面に段をもつもの。

各タイプごとに、

Iタイプ 柱痕痕跡をもたないもの。

II-①タイプ 先端が平らな柱痕痕跡をもち、先端がピットの底部と同じか高いレベルにあるもの。

II-②タイプ 先端が平らな柱痕痕跡をもち、先端がピットの底部より低いレベルにあるもの。

III-①タイプ 先端が尖った柱痕痕跡をもち、先端がピットの底部と同じか高いレベルにあるもの。

III-②タイプ 先端が尖った柱痕痕跡をもち、先端がピットの底部より低いレベルにあるもの。

C地区で確認したピット400基全体では、Aタイプが49%、Bタイプが45%、Cタイプが残りの6%を占め、A・Bタイプで約半数づつの割合を占めている。また、柱痕痕跡が無いIタイプは全体の約6割を占める。柱痕痕跡をもつII・IIIタイプの中ではII-①タイプが最も多く23%を占める。

建物を構成する88基の柱穴では、Aタイプが75%、Bタイプが19%、Cタイプが残りの6%を占め、ピット全体での割

	A	B	C
I	SB07 P4	SB13 P3	SB09 P11
II-①	SB09 P15	SB10 P7	
II-②	SB05 P2	SB09 P17	
III-①	SB10 P4	SB10 P5	
III-②	SB06 P6	SB06 P4	

第32図 C地区ピット分類

合と比較すると底面が平らなAタイプの割合が増える。柱痕痕跡の有無の割合は、同数でII・IIIタイプの中ではII-①が最も多く33%を占める。このように、建物を構成する柱穴は形態的な偏りが見られる。建物の中での各タイプの柱穴の分布はSB03・08などの規模の小さい建物はA1・B1タイプが多くなる。規模の大きなタイプの建物はA・BのII-①タイプが多くなるが、廟の部分はA1・B1タイプの割合が多い。

### b サク状造構

当地区では近世以降と中世初頭に属する2時期のサク状造構を検出した。共に深さ約5cm、幅40~50cmの溝が1~1.2m間隔で規則的に並んでいる。現地形は東側が一段低くなり、全体的に北東側に向かって緩やかに低くなっている。近世以降のサク状造構は主軸方向をN-21°-Eで現地形の傾きにはほぼ平行に構築されており、島の畦は地形の傾きに対し平行（直行の可能性もある）して作られると仮定出来る。この仮定に従えば、中世初頭に属するサク状造構の時期には崎川は今とは違う場所を流れ、地形は現在と違い北東方向に低くなっていた可能性がある。

### c 溝

調査区を南北に流れる溝（SD224・225）について述べる。溝においても先のサク状造構の項で述べた地形が変化した様子が見られる。調査区の東側が一段低くなる段の境にSD224・225は位置している。溝には常に水が流れおり、用排水・区画溝などの可能性が挙げられる。この溝の方向を基準として他の造構も構築されている。掘立柱建物のグループ2（13世紀中～後半）以降は他の土坑・溝も主軸方向をSD224・225に対し直行もしくは平行関係となり規制を受ける。この時期に崎川の流れが東に移り、現在の地形の原型ができると考えられ、この地形の変化に伴いSD224・225が構築されたと思われる。

近世の溝SD224・223もほぼ同じ位置を流れ、性格もSD224・22と同様である。数回の田なおしにより溝は消滅したが、現在も田園の畦の形でその意識の継続が見られた。

### (3) D地区

調査区の中央を埋没河川が通り中世の造構は埋没河川の上に構築される。造構は調査区の北側に集中地点がある。

## 2. 遺 物

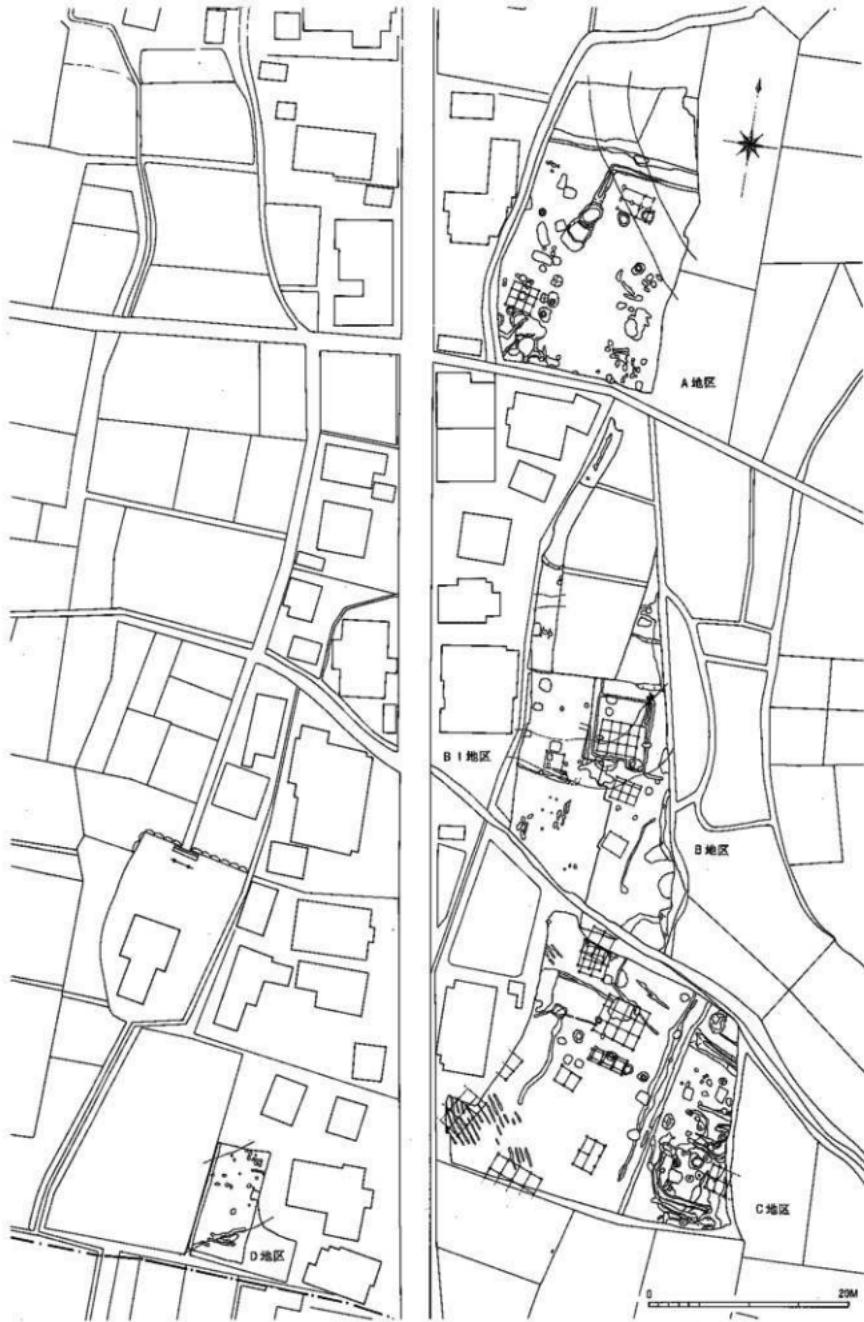
今年度の調査において出土した土器・陶磁器は、その多くが包含層から出土したものである。先に分類した中世土器の帰属時期はこれまでの研究成果【宮田1992】を参考にすれば、Aタイプの1・2・4は越中でロクロ土器が消滅するI期にあたる。A3タイプは県内では見られない器形であるがロクロ土器の最終段階としてI期の第3小期に位置付ける。B1~4タイプの非ロクロ2段なり土器もI期にあたる。この中でも、なで幅の広い1・2タイプはI期の第1小期に、ナデ幅の狭い3タイプは第2小期、口縁を摘むようになる4タイプは第3小期にそれぞれ位置付けられる。5①③タイプは1段ナデの土器が出現するI期の第3小期、②は口縁部が外反しておりII期の第1小期に位置付けられる。B6タイプは口縁端部に面取りを施すようになるI期の第3小期にあたる。B7タイプは白っぽい胎土をもち口縁を軽くナデるV期の第2小期にあたる。B8タイプは口縁部を垂直に立ち上げるタイプのも

	A	B	C	計
I	110 (56%)	125 (68%)	22 (64%)	257
II-①	63 (31.5%)	29 (18%)	— (0%)	92
II-②	10 (5%)	8 (5%)	— (0%)	18
III-①	8 (4%)	9 (6%)	— (0%)	17
III-②	9 (4.5%)	12 (7%)	— (0%)	21
計	200 (100%)	183 (100%)	42 (100%)	405

表3 C地区ビット分類

	A	B	C	計
I	27 (41%)	12 (18%)	5 (35%)	44
II-①	26 (30%)	3 (18%)	0 (0%)	29
II-②	5 (8%)	0 (0%)	0 (0%)	5
III-①	4 (6%)	1 (6%)	0 (0%)	5
III-②	4 (6%)	1 (6%)	0 (0%)	5
計	66 (100%)	17 (100%)	5 (100%)	88

表4 C地区柱穴分類



第33図 小倉中稻遺跡平成4・5年度調査地区遺構配置図(1/1,250)

のでII期の第3小期にあたる。B9タイプは県内では見られない器形であるが先のB8タイプにプロポーションが似るため、同じII期の第3小期に位置付ける。

以下、出土遺物の中で特徴的な遺物について各地区に分けて述べる。

#### (1) B1地区

中世土師器はA1・B2タイプが多く全体的に古い様相を示し、12世紀中頃～後半を中心時期とする。輸入陶磁器は白磁が1点出土している。

#### (2) C地区

中世土師器はB5タイプが多く、包含層の下層ではA3タイプが多く出土している。他のタイプの中世土師器はほとんどが破片で出土しているのに対しA3タイプは完形に近い形で、まとまって出土している。A3タイプは県内では出土例はないが、県外の例では石川県珠洲市の栗津小学校遺跡、福井県永寺長興寺遺跡の第3・4面から、同様な形態の中世土師器が出土している。陶器類では常滑の鉢の底部片が2点出土している。付高台で外面下部にはヘラ削りを施している。県内では梅原胡麻堂遺跡につき2例を数える。時期は12世紀中頃にあたり珠洲の創業前後の流通形態を考える上で重要である。

##### a ピット出土の遺物

ピットからの出土遺物は少なくSP447・SB03のP3、SB09のP3・12の4基から出土している。SP447からB8タイプの中世土師器(5)が柱痕痕跡から完形で出土している。SB03のP3からはA1とB3タイプの中世土師器(1・2)が根石の下から一括出土している。SB09のP7・12からはそれぞれ覆土の中から中世土師器(3・4)の破片が出土している。

SP447は建物を構成してはいないが、建物の廃絶時の柱を抜き取ったあとに埋納されたと思われる。SB03のP3に関しては建築時に根石の下に埋納したと思われ、この2基のピットの出土遺物は建物の祭祀に関連する遺物と位置付けられる。SB09のP7・12からの遺物に関しては、SB09の検出面は⑩層上層であり、付属するSK270の出土遺物も13世紀代であるため、P7・12の遺物は混入の可能性が高い。

#### (3) D地区

ピットからB9タイプの中世土師器が出土している。形態はB8タイプに似るもの器壁が非常に薄い。県内の出土例はあまりなく特異な存在である。

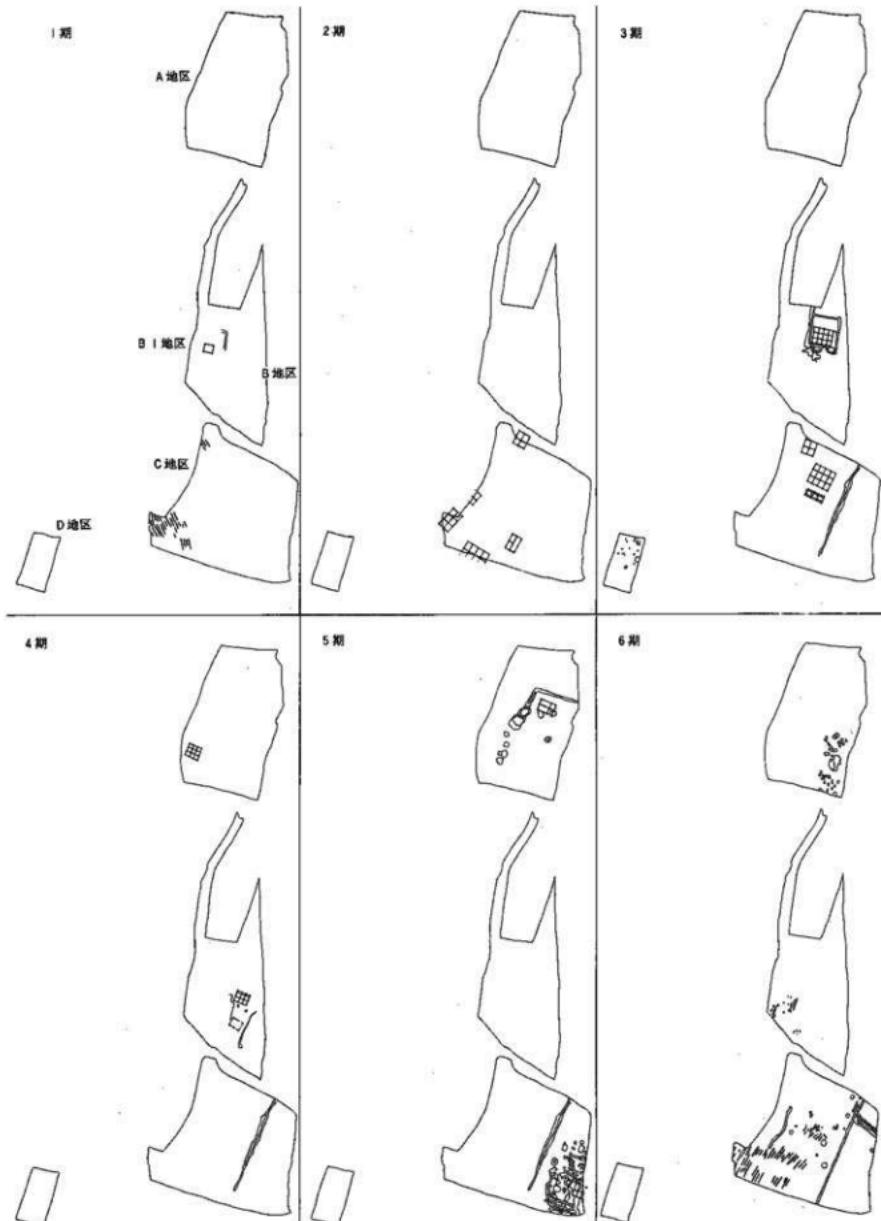
### 3. 建物と遺構群の推移

最後に建物と他の遺構の関連を昨年度の調査区を含めて概観する。遺構の時期は遺構の覆土内の遺物とその遺構の検出面の双方で検討をおこない、遺物の時期と検出面が合わないものに関しては検出面を優先して時期を決定した。なお、時期区分は調査区内の建物・遺構群を相対的に各グループごとに区分したものであり、相互の関係は検証していない。I期以前は古代に属し調査区を数本の峰川の支流もしくは本流である自然河川が横切り、峰川の自然堤防が形成される時期である。中世の遺構はこれらの自然河川が埋没し、自然堤防として土地が安定してから構築される。古代の遺物は須恵器の壺蓋(171)がある。調査地区内には古代の遺構ではなく遺物は流れ込みと考えられる。

I期 B1地区にはSB01が建てられ、C地区には畠が作られる。時期は12世紀中～後半にかけてと考えられる。

II期 B1地区のSB01が廃絶し、C地区の掘立柱建物のグループ1が建てられる。時期は12世紀後半と考えられる。

III期 小倉中稻遺跡の初期にあたる時期である。この時期に峰川の流れが変わり調査区の東を流れ、現地形の原型ができる。この地形の変化に伴いC地区ではSD224・225が構築され、掘立柱建物のグループ2が建てられ



第34図 小倉中稻遺跡時期別構成配置

る。B地区でSB01が建てられる。D地区に遺構が構築されるのはこの時期である。時期は13世紀初めと考える。

IV期 A地区ではSB01・石組遺構など宗教施設関連の遺構が建てられる。B地区ではSB02・03が造られる。遺構の少ない時期で14世紀代である。

V期 A地区ではSB01・石組遺構が廃絶しSB02とSK119、石組井戸が構築される。C地区では一段低い東部に方形区画の溝・掘立柱建物のグループ3が建てられる。時期は15世紀後半～16世紀後半と考えられる。

VII期 近世に入り、A地区では火葬場が造られる。C地区ではSD224・225は廃絶し、代わりにSD141・223・181が構築される。調査区の南側では畠が造られる。

昨年度のA・B地区の調査では小倉中稻跡の存続時期は12世紀後半～13世紀前半と14世紀前半、15世紀後半～16世紀前半の3時期を中心として中世全般と近世にわたり存続したことがわかった。今年度B1・C・D地区の調査では遺跡の出現時期が12世紀中頃まで遡ることが判明した。遺跡の中心部は現在の小倉地区の集落内に含まれると思われ、当遺跡が現在の集落成立と発展に密接な関連をもつものと推定される。

(高梨)

## =参考文献=

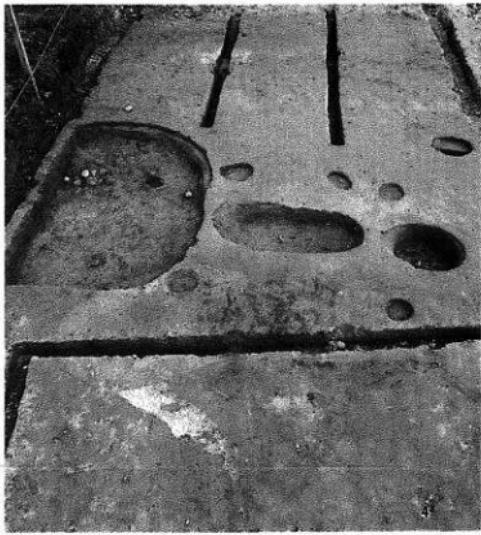
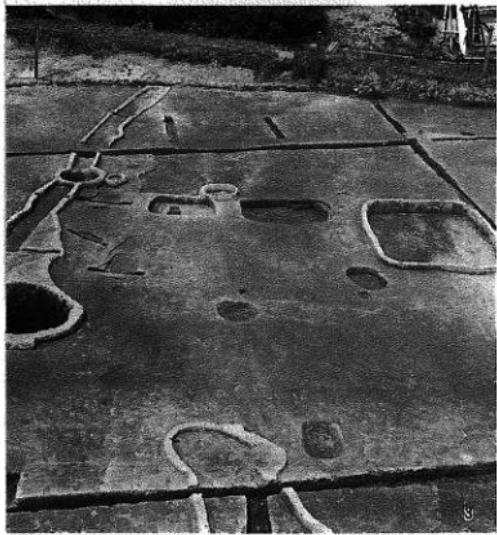
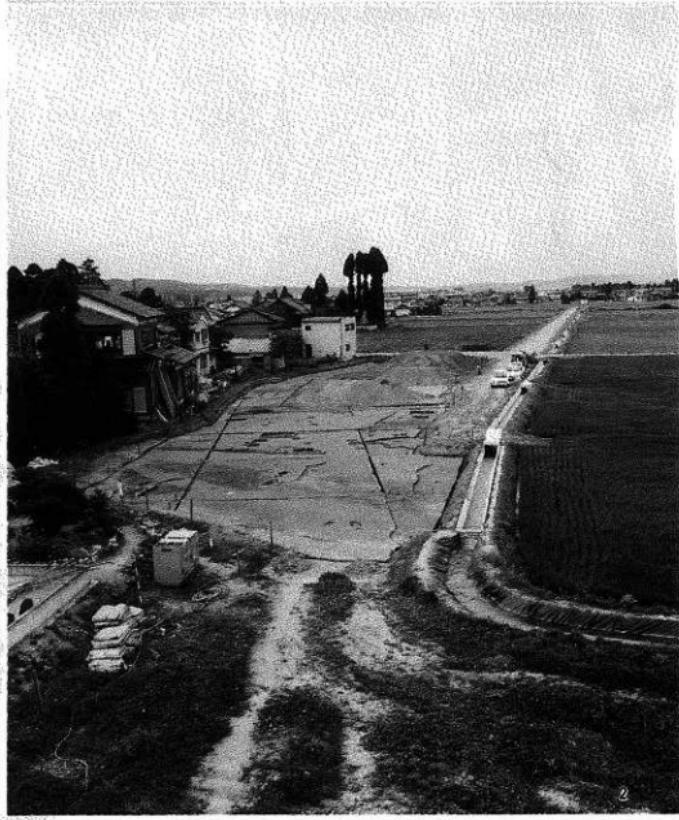
- ウ 宇野隆夫 1989 「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』 真藤社  
上野 駿・押川恵子 1990 「井戸城跡」 井口村教育委員会  
オ 押川恵子 1991 「IV考察 D 中世の土器・陶磁器について」『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告』 富山県埋蔵文化財センター  
カ 桜井光次郎 1988 「北陸地方出土の瓦質土器について」『第8回研究報告会資料中世後期の瓦質土器について』 中世土器研究会  
龜井明徳 1988 「日本貿易陶器史の研究」 同朋社  
サ 斎藤 隆・荒井 隆 1993 「富山県福光町梅原山村遺跡群Ⅰ 梅原上村遺跡群Ⅰ」(農地部分) 福光町教育委員会  
斎藤 隆・荒井 隆 1993 「富山県福光町梅原山村遺跡群Ⅰ 梅原上村遺跡群Ⅰ」(墓道部分) 福光町教育委員会  
ザ 財富山県文化振興財団 1991 「東海北陸自動車道関連発掘調査報告(1)」  
財富山県文化振興財団 1992 「東海北陸自動車道関連発掘調査報告(2)」  
シ 清谷忠章・佐藤真二郎 1988 「中世墳墓の地域的様相」『考古学ジャーナル304 中世墳墓の諸問題』 ニューサイエンス社  
タ 田口昭二 1985 「考古学ライブラリー-17 美濃焼」 ニュー・サイエンス社  
多治見市教育委員会 1993 「多治見の古窯第3号 美濃窯の焼物」  
ツ 辻佐伸 1992 「皿と銅鏡-中世地盤の遺構の一様相-」『真朱』 徳島県埋蔵文化財研究会  
フ 藤沢良祐 1990 「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要IX」 瀬戸市歴史民俗資料館  
ホ 北陸中世出土研究会 1988 「北陸中世土器・陶磁器・漆器」  
北陸中世土器研究会 1989 「北陸における越前陶の諸問題」  
北陸中世土器研究会 1990 「中世北陸の在堆廬」  
北陸中世土器研究会 1991 「城館遺跡出土の土器陶磁器」  
北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」  
モ 森都夫 1991 「古代・中世の地誌め」『第6回中世遺跡研究会 中世のまじない』  
ヨ 横田賀次郎・森田 雄 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4巻』 九州歴史資料館  
吉岡康輔 1989 「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館  
吉岡康輔 1988 「北東日本における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』 国立歴史民俗博物館



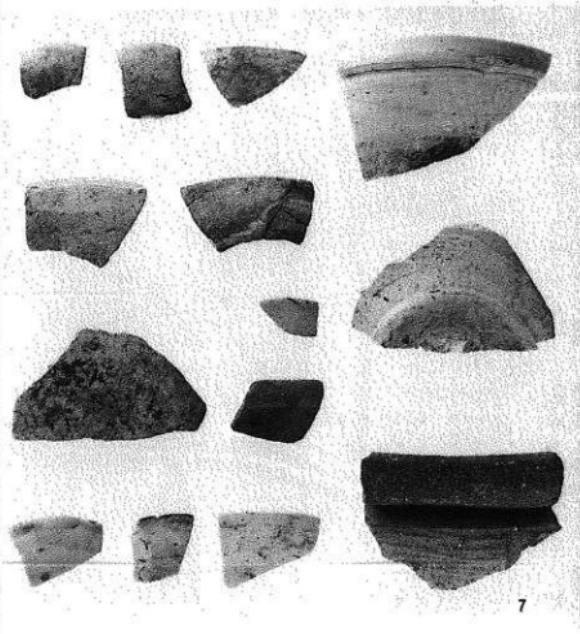
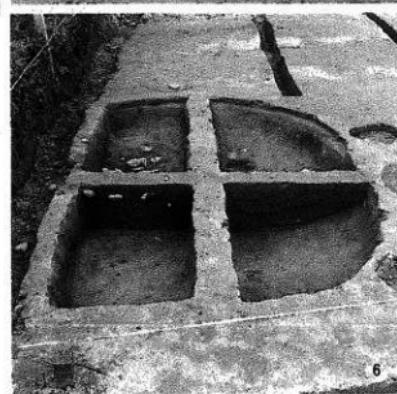
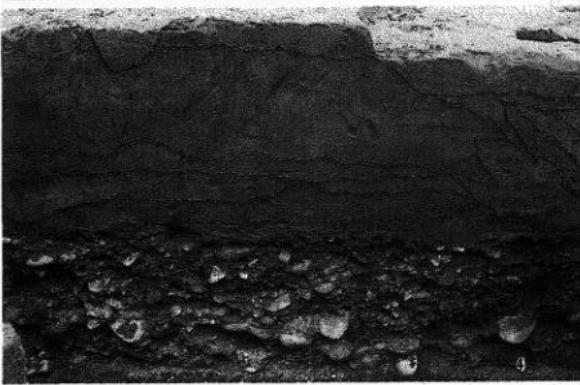
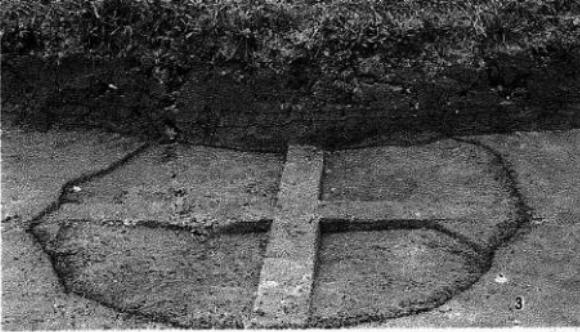
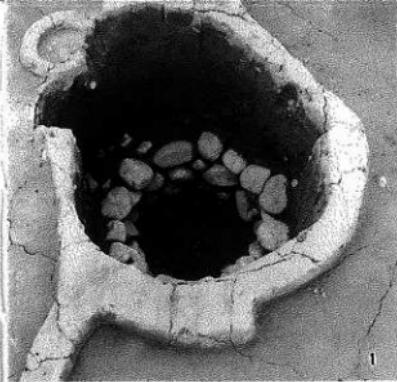
1. 小倉中筋道路周辺航空写真



図版1 1. 小倉中筋道路周辺航空写真 2. 平成5年度調査区全景(東から)



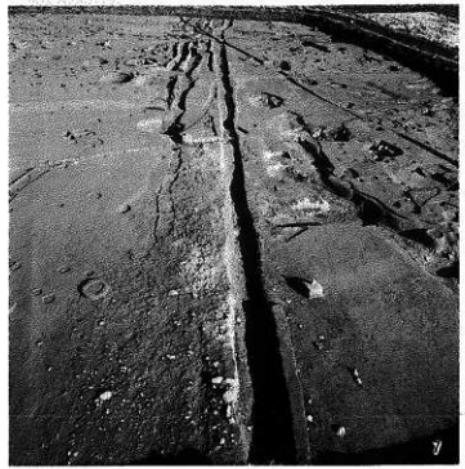
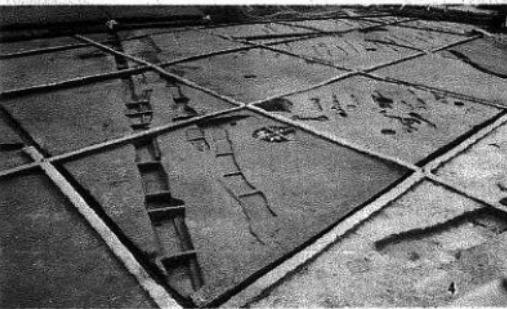
図版2 1. BI地区全景 2. BI地区全景(南から) 3. SB01(東から) 4. SB02, SK01・02・04(南から)



図版3 1. SE38(東から) 2. 同断面(西から) 3. SK30(東から) 4. A-A'セクション(西から)  
5. SK02(南から) 6. SK04(南から) 7. 出土遺物 \*番号は実測番号

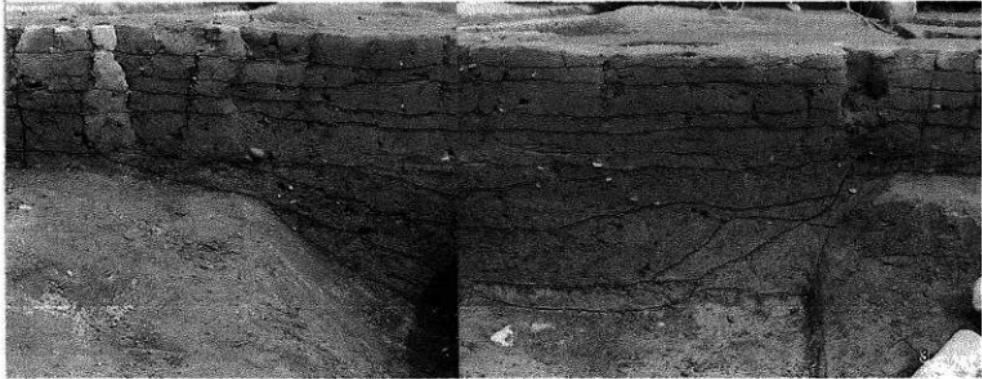


図版4 1. C地区全景(南から) 2. 同(上から)



図版 5 1. サク状造構(東から) 2. 同(南から) 3. 中央部サク状造構(南から) 4. 同(北から)

5. SB10・11(南から) 6. 同(西から) 7. SD144・223・224・225(南から) 8. 北東部ブロック(西から)



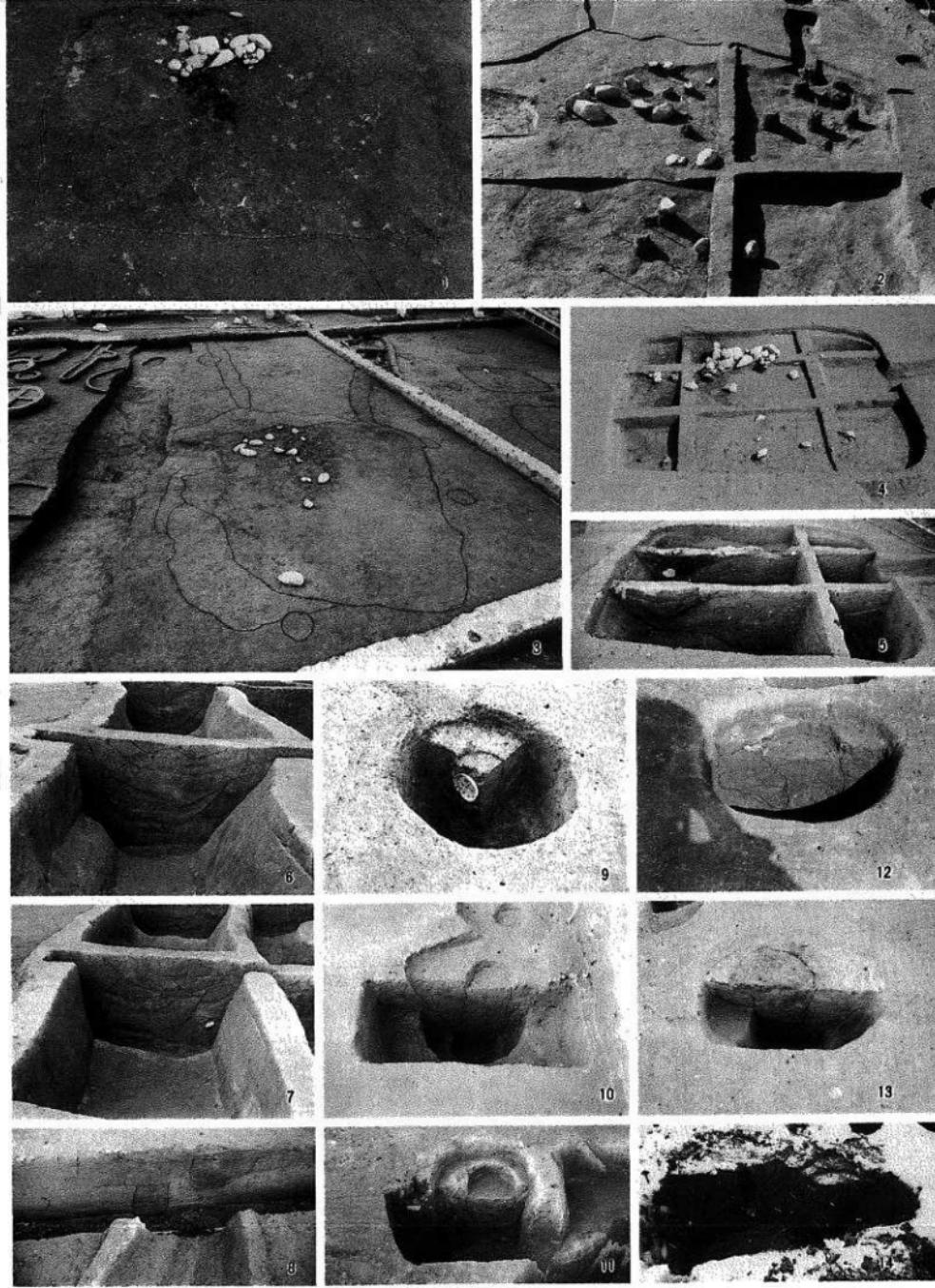
図版 6 1. 調査区南東部ブロック(西から) 2. 同(北から) 3. 南東部基本署位、SK148(南から)



図版 7 1. SD122集石(南から) 2. SD139集石(南から) 3. SD128e-e'セクション(西から) 4. SE127(南から)  
5. SE138(西から) 6. SE144(南から) 7. SE228(南から) 8. 同断面(南から) 9. SE159(西から)



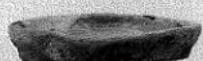
図版 8 1. 調査区北部ブロック(南から) 2. 同(西から)



図版 9 1. SK151(南から) 2. SK270(東から) 3. SK270(東から) 4. SK151(南から) 5. SK151(南から) 6. SD225(南から)  
7. SD225(南から) 8. SD271(西から) 9. SP447(北から) 10. SP434(南から) 11. SP441(南から) 12. SP415(南から)  
13. SP446(西から) 14. SP402・403(西から)



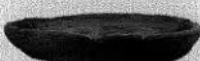
図版10 1. サク状造構(南から) 2. 同、B-B'セクション(南から) 3. 同、C-C'セクション(南から) 4. SK153(東から)  
5. SK97(南から) 6. SK223(西から) 7. 作業風景



105



104



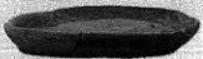
103



32



36



30



5



38



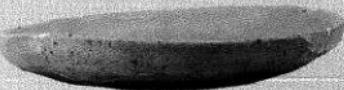
121



1

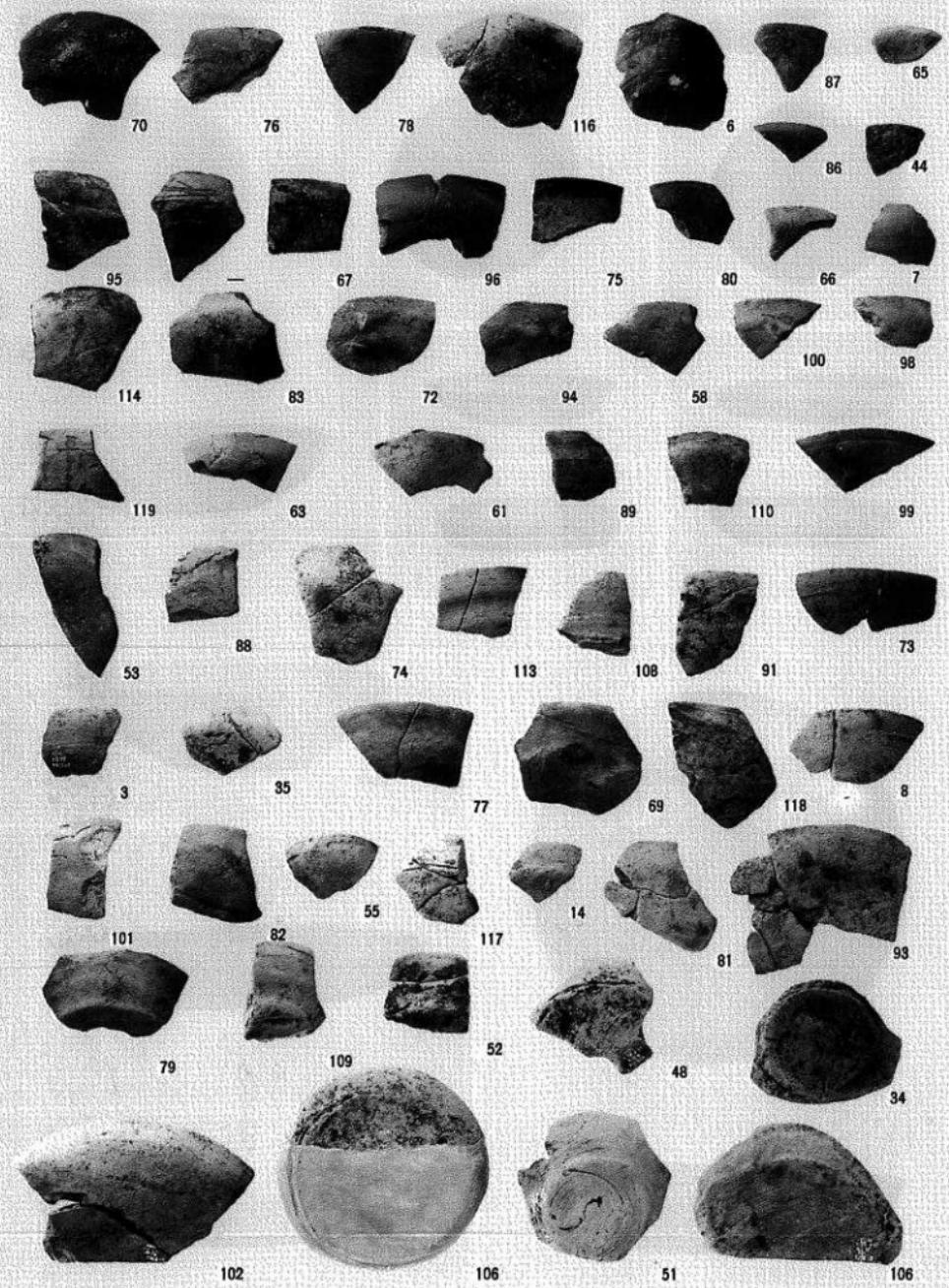


2

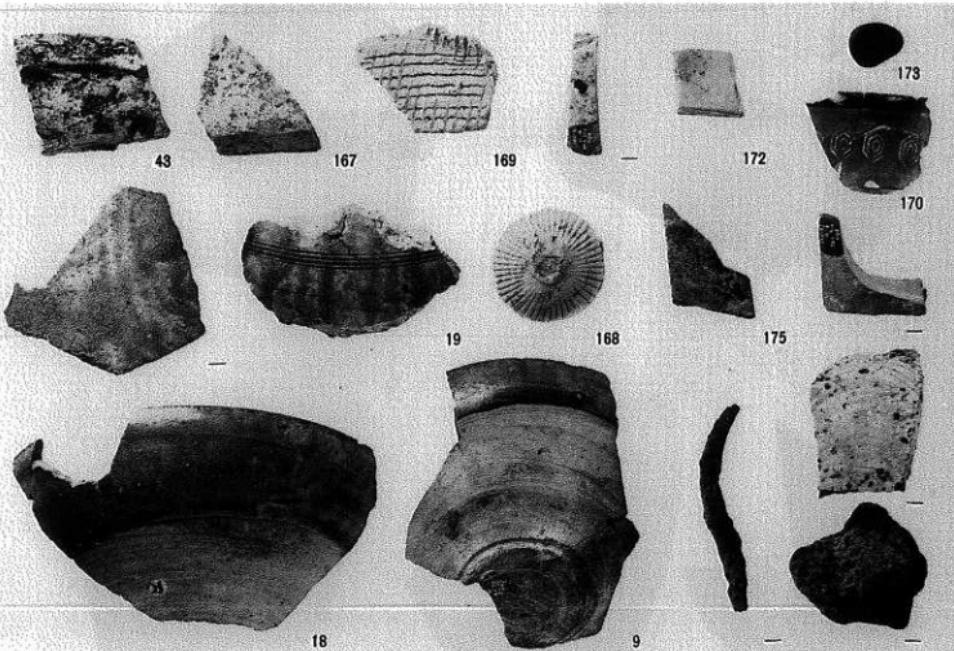
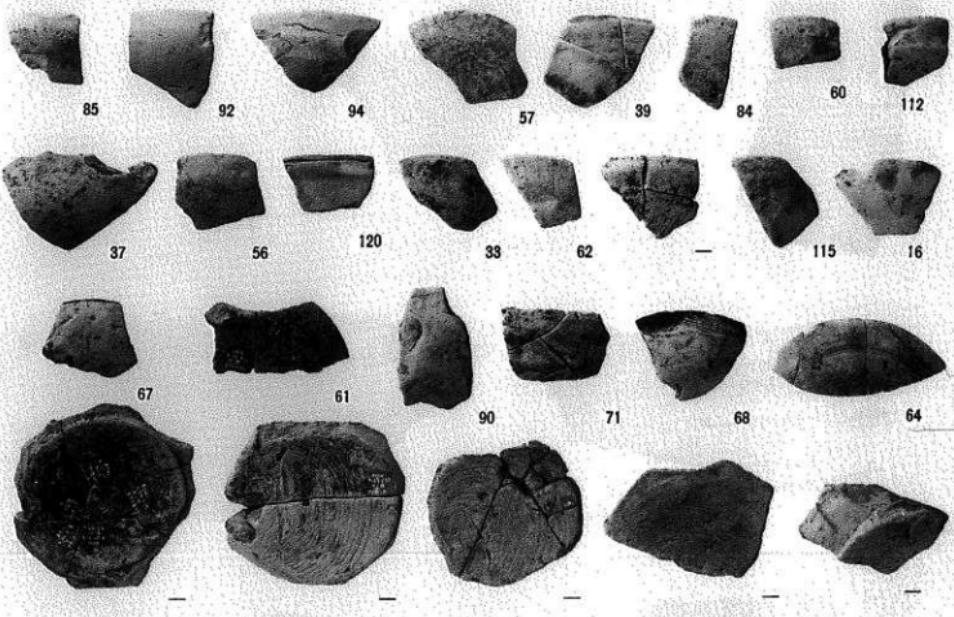


70

図版11 出土遺物 \*番号は実測番号



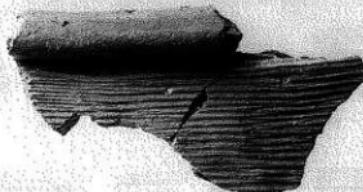
图版12 出土遗物



图版13 出土遗物



12



13



145



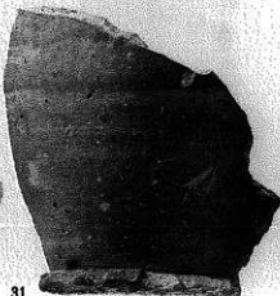
154



23



31

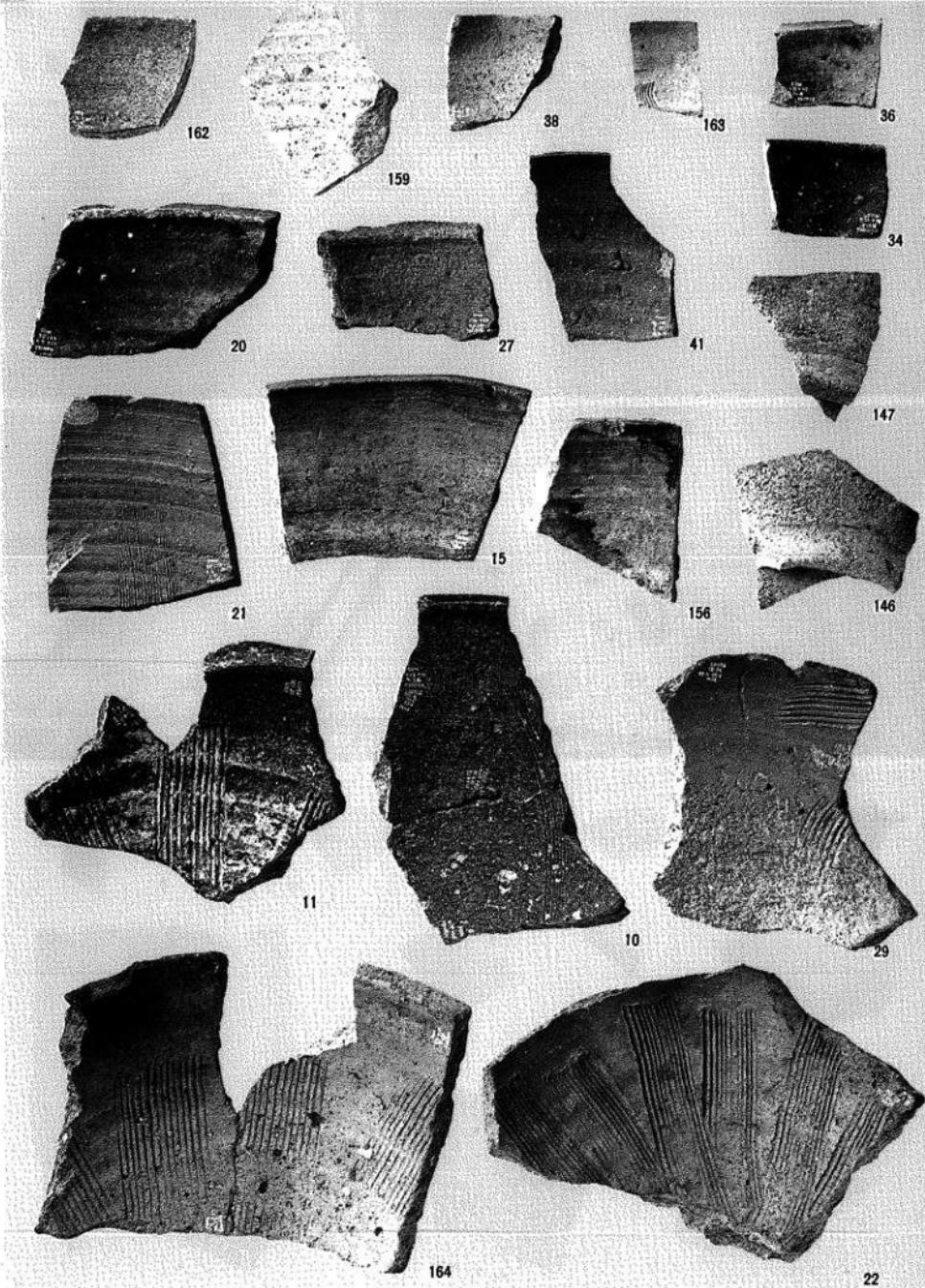


25

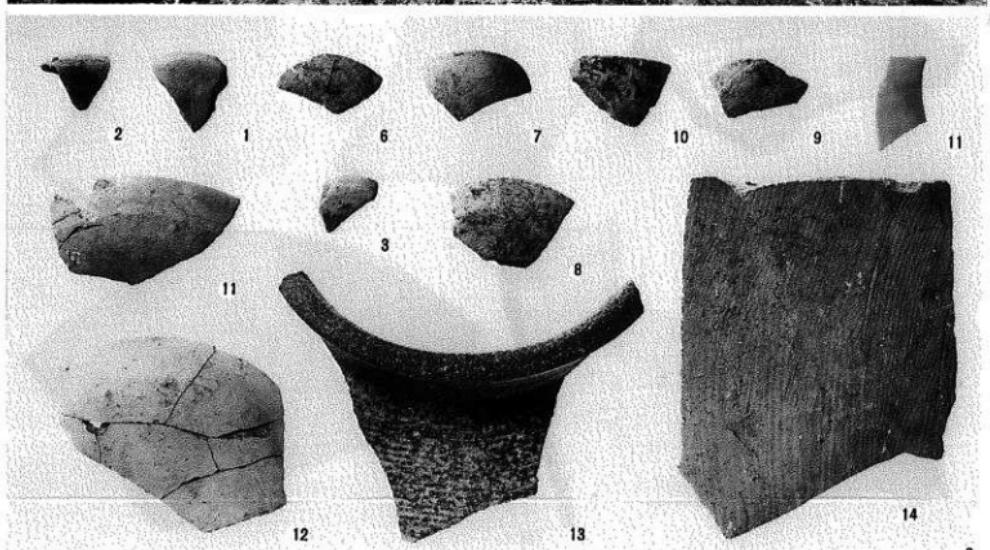
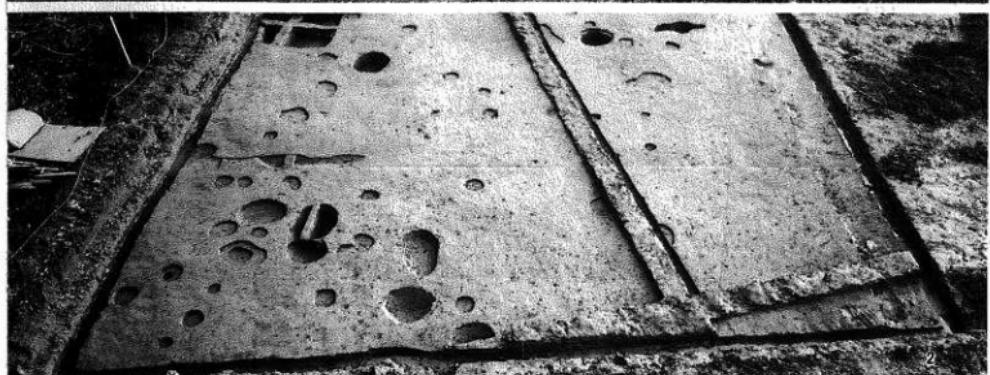


160

圖版14 出土遺物



図版15 出土遺物



図版16 1. D地区全景(西から) 2. D地区北部ブロック(北から)

3. 出土遺物 \*番号は実測番号

報告書抄録

ふりがな	おぐらなかていせきはくつちょうしほうこく(2)						
書名	小倉中稲遺跡発掘調査報告(2)						
シリーズ名	県営農地流動化特別促進は場整備実験事業(婦中町小倉地区)に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告						
シリーズ番号	(2)						
編集者名	高梨清志 片岡英子						
編集機関	富山県埋蔵文化財センター 婦中町教育委員会						
所在地	〒930-01 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764-34-2814 〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111						
発行機関	婦中町教育委員会						
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111						
発行年月日	西暦1994年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おぐらなかていせきはくつちょうしほうこく(2) 小倉中稲遺跡	富山県婦負郡 婦中町小倉	016362	046	36°37'14"	137°08'18"	930705 ~931224	3940	県営農地 流動化特 別は場整 備実験事 業に係る 事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
小倉中稲遺跡	集落遺跡	中世	掘立柱建物 井戸 溝 サク状遺構 土坑 ピット	16棟 5基 28条	須恵器、中世土師器、青 磁、白磁、珠洲、越前、 常滑、瀬戸、美濃、八尾、 伊万里、瓦質土器、砥石、 硯、幕石、木製品、鉄滓
		近世	井戸 溝 サク状遺構 土坑 ピット	1基 4条	

平成6年3月31日発行

富山県婦中町  
小倉中稲遺跡発掘調査報告

編集 富山県埋蔵文化財センター  
婦中町教育委員会  
発行 婦中町教育委員会  
富山県婦負郡婦中町速星754  
印刷 ブルチューエツ